大正元年十月一日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行) 大正二年三月一日發行 第一卷第六號

# 近代思想

## 三月號

■DILEMMA (詩)……綠　葉(一)
■羞恥と貞操(評論)……大杉榮(二)
■藝術か戰鬪か(評論)……荒畑寒村(六)
■ユットナア博士(詩)……土岐哀果(九)
■晝の街路にて(詩)……上山草人(一〇)
■背綸社講演會(批評)……榮(一三)
■物を食ふ事を恥づる人民(寓話)……利彦(一三)
■新刊紹介……記者(一四)
■BLANK・MIND (詩)……佐藤綠葉(一六)
■ドリイマアよ(詩)……荒畑寒村(一七)
■惑星旅行(小說)……安成貞雄(一九)
■怪物(小說)……大杉榮(二一)
■人と超人(脚本)……堺利彦(二七)
■二月の小說(批評)……寒(三六)
■大久保より(雜錄)……榮(三八)
■社會主義とニーチエ(手紙)……久津見厥村(三九)

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二

# 實業之世界

三月一日號

大正二年三月一日發行
每月二回一日十五日發行
定價一冊郵稅共十二錢　半年分一圓卅八錢　一年分二圓六十四錢

▼感情の精粗偏圓……幸田露伴
▼節操論……福澤桃介
▼工夫の才を働かせて出世した新實例……西鄉十藏
▼山本內閣を倒壞せよ……覆面國士
▼政商論……安部磯雄
大藏大臣……三宅雪嶺
▼活天狗物語……岩谷松平
▼通信上の販賣苦心……濱田四郎
▼通貨の膨脹は生活難と直接關係なきや……福田德三
▲天理農法反對者は馬鹿……堤
▼唯夫れ至誠の一路に還れ……伯爵　大木遠吉

發行所　東京芝露月町　實業之世界社　振替貯金口座　三三二四

顧問　澁澤男爵　森村市左衛門　◎　編輯顧問　井上哲次郎　宮田脩

# 向上

每月一回二日發行

金十一錢　郵稅一錢

## 修養團

**事業**　▲機關雜誌「向上」の發行▲講演會の開催▲各地遊說▲監督寄宿舍の經營▲青年志士の團結

**支部**　今や各地に本團の支部廿餘の設立を見青年團々長各學校模範學生及青年指導者の團結日に多く鞏固なる團結將に成らんとし支部幹事の活動漸く盛也

**後援**　澁澤、森村兩顧問を始め河野廣中氏床次竹次郎氏阪谷市長、辻男爵、手島高工校長等三十餘名高潔の先輩熱心に各方面に盡力せらる

**盟契**　各地憂國赤誠の青年諸君希くは一切の私情を去り帝國青年風紀革正の同志となり以て青年指導の中心たらんことを

**入團**　眞に風紀革正の急務を感じて同志たらんとする者は團費半年分六十錢を添へ本團へ申込まるべし▲本團の趣旨は雜誌向上に記載せり

## 青年の大同團結

●三月號目次●

●名か利か　井上哲次郎
●國民的修養　加藤咄堂
●英國學生々活　飯塚正一
●新らしく卒業して社會に入らんとする青年諸君の爲に　澁澤榮一
●讀書の趣味　海老名彈正
●走狗となる勿れ　森村市左衛門
●活修養と時局　松岡子誠
●皇國策私見　宮田脩
●人情の懐　蓮沼門三
●寄宿舍論　飯塚正一
●織田信長論　山路愛山
●私が雲井龍雄を救ひたる時　田邊八彌

修養團本部　東京四谷區左門町二五
電話番町四五五（番）　振替口座東京一〇九〇三番

## 賣文社

▲營業種目▲新聞雜誌書籍の原稿製作▲和文の英佛獨語の翻譯▲演說講義談話の筆記▲趣意書意見書廣告文書簡文其他一切文章の立案代作及添削

▲近地御一報次第參上

**堺利彥**

四谷區須賀町五二

## 英語獨逸語教授

四ッ谷區寺町三十一
天王横丁坂上

高畠素之
小原愼三

■本誌の讀者に限り定價の二割引にて撮影可仕候

■遠近に係はらず出張撮影の依賴に應ず

寫眞師 **千賀俊月**

東京市小石川區安藤坂下
吉見寫眞館

實用新案特許

## ピラミツト

ピラミツトはマッチ一本にて直ちに燃えつき、如何なる堅き新炭又は石炭にても、たつた一個にてたきつけ得る事請合也。又ピラミツトは在來品と違ひ、無烟無臭にして清淨なる故、上等の御座敷又は臺所にて御使用なさるとも決して汚れる憂なし。市内の御注文は御一報次第多少に係はらず直ちに持參す

定價百個入 金拾錢

府下代々木字山谷一一三
市内一手販賣 **林商店**

世論は……

本書を忠實なる最近思想の研究にして思想界出色の快著也と評す

明治●法政●國學院大學講師●雜誌「新日本」主筆 文學士 樋口龍峽先生著 ■忽ち參版■

# 近代思想の解剖

クロース綴畫入皮背美本 ●全一冊菊判●五百余頁 金壹圓五拾錢 □送料金十二錢□

■現代論壇の明星！樋口先生が十年の研究と二年の苦心の結晶たる本書は現代文明の解釋にして深刻なる批判也、最近一百餘年間の一切の思潮（哲學・文藝・科學・宗教）は固より社會的・政治的方面の思想まで近代民衆の精神に影響を與へたるものは其學說の由來・特長・効果に涉り文明史的見地と批判的立脚地とに立ち細大漏さず解說して讀者の眼前に鳥瞰圖を開展せしめ進んで思想界の將來に適確なる暗示を與ふ

■現代思想に生きて社會を雄飛せんとするの士、現代民衆の趨向を知らんとする士は來りてこの興味深き廣義の文明史に就け。必ず適確なる斷定を下すべし。宜なる哉！江湖の歡迎文壇を壓して今や增刷を要求す。

酒井鼠兒先生著
刻苦七年大著

# 植物の文學的研究

クロース綴畫入頗美本紙數九百頁 壹圓八拾錢 送料金十二錢

東京京橋區南槇町十八

**廣文堂**

振替東京四六八四番
電話京橋二四六三番




第一巻第六號

# DILEMMA.

いらだゝしき一夜、
群集と巡査とは睨みあひ、
街燈の瓦斯の灯も常より青し。

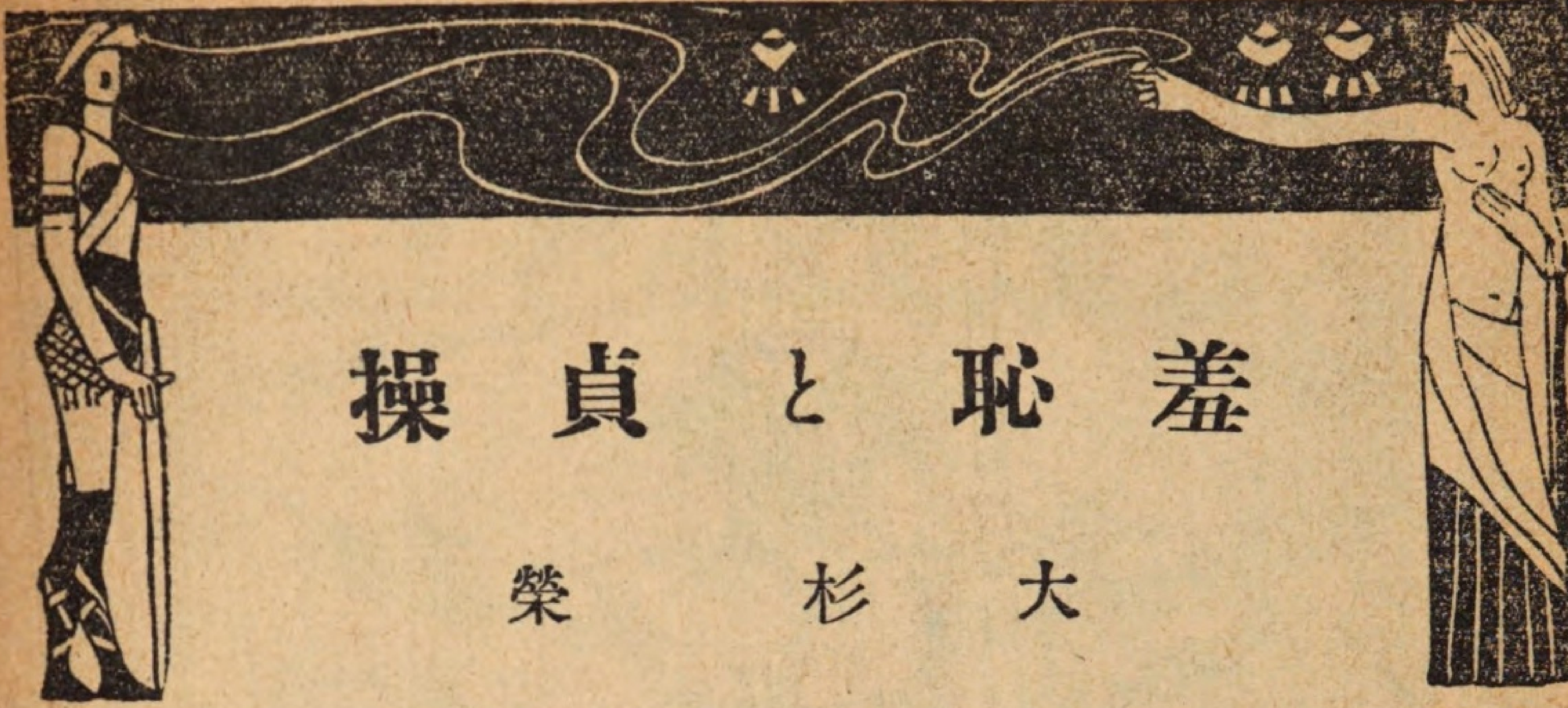
窓硝子のやぶるゝ音に、
喜びて叫ぶ聲、恐ろしき鬨の聲、
馳せちがう民衆と警官の劍鞘のおと。

哀れにも暴君のくるしむ姿。
われもまた群集ともろ共に手を打つて
幾度か「バンザイ」を叫ばんとせしが、されど………

かの家にはわが椅子あり、
わがペンもあり、
かゝる時なほ忘れえざるわがパンの家。

雨のごとく石はふり、
群集は狂ほしく鳴りわめく。
いらだゝしき銀座の一夜。

——綠葉——



# 羞恥と貞操

大杉榮

## 一

猫は屋根の上で、犬は道ばたで、人目は勿論猫目も犬目も憚らずに、しかも大聲を立てゝ戀をする。何故人間のみは、あんなに戀を恥かしがるのだらう。

蛤の赤身を平氣でひろげて見せてゐた小娘が、年頃になると、何故急に、あゝも事毎に恥かしがるのだらう。

湯屋の三助に背中を流させて得意でゐる女が、相許した男には隨分痴態を演じても見せる女が、何故外の男の前では、手足の膚一つ露はす事すらに、あんなに恥かしがるのだらう。

男はそんなでもないのに、何故女は、あゝ謹しみ深いのだらう。それも田舍のよりも都會のに、所謂文明の優れた國のに、何故あゝも嚴しいのだらう。

これは一般の人々に取つて、極めて平凡な疑問であるかも知れぬ。從つて其の解釋も亦、極めて容易であるかも知れぬ。しかし其等の人の疑問や解釋の多くは、始めから羞恥や貞操を婦人本來の、しかも美はしき道德として決めて了つた上での疑問や解釋に過ぎない。

羞恥や貞操がそんなに有りがたいものか或は下らないものかに就いては、僕は今議論をしない。只僕は、前號の奴隷根性論に倣つて、比較人種學上の事實を列擧して、此等の性情が必ずしも婦人本來のものでない事と、及び其の起因とを、多少其處に暗示し得れば足りる。

## 二

原始人は動物と同じく、裸體でゐる事に又生殖慾を滿足さす事に、些の羞恥或は貞操の觀念を持たない。

先づオーストラリアでは、自由な女、即ち持主を持たない女は、自分の好き勝手に其の身體を取扱つてゐる。そして何人もこれに干渉する事を思はない。十二三才の男の子と女の子とは、思ひ〳〵に自由に共棲してゐる。屢々親と子とが結合する。又部落の御客の處へは、必ず若い娘がお伽に出る。これはニユー・カレドアでも、アンダマン諸島でも、或は恐らくばメラ子シア全體の蠻人の風習である。

けれども一旦女が或る男の持物になると其處に制限が課せられる。しかし、これとても何等の道義的意味があるのではなく、

只所有權から出た事に過ぎない。女は男の物である。屢々男は其の友人や何にかに、或は無代で或は有代で、其の妻を借す。そして男の許可なくして所謂不貞をする女は嚴罰に處せられるのだが、持主たる男には素より絶對の自由が保留せられてゐる。此の事は猶後にも云ふが、男が女を物として取扱ひ、これを使用し濫用する權利を持つやうになつたのは、蠻人が共産制を離れて私有財産制の味を覺えてから後の事らしく信ぜられる。

メラ子シアの男女が性交をするのは、いつも林の中か藪の中かで、しかも眞晝中である。そして其の性交の方法も、頗る妙なもので、全く動物的と云つて善い。即ち犬のやるのと變りはない。

更にメラ子シヤからポリ子シヤに行くと殆んど動物と同樣の兩性關係を見出す。其の自由は不規則と云ふのぢやなくつて、始めから全く規則がないんだ。亞米利加の一旅行者ポーターは云つてゐる。『吾々の云ふやうな道德は、全く彼等の間に知られてゐない。其の行爲を恥などゝは少しも思はぬ。却つて自然のそして罪のない樂しみだとばかり思つてゐる。』又佛蘭西の一旅行家ヴァリニーは言つてゐる『此等の諸島にゐる宣教師が最も困難とするのは、女に羞恥や貞操を教へる事だ。彼等はそんな言葉も知らなければ又何んなものだかも知らない。そして近親相通じたり姦通したりするのは當り前の事となつて、輿論も之れを容れ、宗教も亦之れを視認してゐる。』

## 三

現にソサイテ諸島や其の他の多くの群島に、アレオイ講と云ふ性慾を恣に満足さす事を目的とする、有名な宗教上の組合がある。今此の組合の事を詳しく述べるが、これでポリ子シア人に全く兩性道德のない程度も分り、又これだけ知れば、何んな事實に遭つても驚かないやうになる。

アレオイ講はオロと云ふ神を其のパトロンに仰いで、講中の者は男女の別なく總て此の神の保護の下に、普通人以上のえらい人間となつて、死ねば此の神の天國に其の影を受け容れられる。其の多くは貴族であるが平民も入講を許され、講中では一切の俗界的階級の區別がない。一体此等の諸島では階級制度が隨分嚴重に行はれてゐるのである。其の入講に就ては、以後生るべき子供は總て殺して了うなどゝ誓ふやうな、いろ／＼難しい宣誓や儀式や試驗などがあるが、それは此處で略して置く。

先きにも云つた如く、此の講の目的は色慾の恣なる實行と滿足とである。講中のあらゆる女は、講中の有らゆる男の共有であつて、しかも男女の二人は二三日以上一緒になつてゐる事がない。其の生活は不斷のお祭りとも云ふべきもので、宴會、唱歌、舞踏止む時がない。時として又、島から島へ皆んな一緒に旅行して、到る處に其の團体は歡迎せられる。女はテモロデと云ふ極めて淫猥な踊を、等しく極めて淫猥な歌に連れて踊つて、一座の者の淫心正に酣なるに及んで、突如として男女相抱擁して、互に慾を充たす。兒殺は講中の法律である。若し其の子を生かして置かうと思へば講中の男の誰れかを養父にしなければならぬが、そうなれば男も女も講中から逐ひ出されて了ふ。

猶此の講中に入るのは、ポリ子シヤ人に取つて無上の名譽になつてゐる。クツクが英吉利へ連れて來た一タイチ島人は、其のアレオイ講員たるの資格を以て、大英國皇帝に讓ないものと主張してゐたと云ふ話が

ある。

## 四

此の奇妙なる講中は、明かにポリネシヤ人が理想生活の實現を目的としたものであるが、此の理想を產んだポリネシヤの社會風俗に、猶一瞥を加へて見るのも面白からう。些かでも羞恥とか貞操とかの觀念のある處に、此のやうな講中の產れ出やう筈がないのである。

女の兒等は早くから其のお母さんに、彼のチモロデの舞踏を仕込まれる。男女とも丸裸でゐる事を何んとも思はない。タイチ島の女は、腰から下をまくり上げるのを禮儀だと心得てゐる。

斯んな風で、娘はまだホンの子供の時から、極めて淫逸な生活を送つて、絶えず其の身を男に與へ又賣つてゐる。そして親は遠慮もなく之れで儲けてゐる。性交は公然に行はれて、誰れの前でも憚る處がない。又家の中でゝも、之れを秘密にする事が不可能なんだ。家と云つても、屋根を柱で支へて、それに蓆を掛けて置くに過ぎない。且つ其の家の中でも、皆んな同じ蓆の上に、丸裸になつて一緒に寢るんだ。

けれども結婚した女、即ち或る男の持物になつた女は、理論上、夫の許可がなければ勝手な行は出來ない事になつてゐる。しかし男は其の思ふがまゝに、妻若しくは妻共を貸すのも賣るのも自由だ。そして其の夫の云ふなり次第に、誰れにでも其の身を任せるのが、妻若しくは妻共たるものゝ義務になつてゐる。且つ所謂タイオと稱する親友の間には、自由に妻を貸借する權利義務がある。

クツクの言に據れば『彼等の間には淫猥などゝ云ふ考が少しもない。丁度吾々が親戚や友人などゝ一緒に飯を食つて腹を充たすのと同じやうに、何んの遠慮もなく公々然に其の性慾を充たしてゐる。』

## 五

斯んな自由な兩性關係の處には、必然にに亦、裸體を何んとも思はない風俗が想察せられる。現に有らゆる原始野蠻人には著物がない、或は極めてお粗末なものである尤も此處に著物と云ふのは、特に羞恥の著物である。野蠻人と雖も、寒暑や霜雪に對して、自分の身を保護する位の事は隨分やつてゐる。

裸體は殆んどメラネシヤ全體の規則になつてゐる。タスメニア人やメラネシヤ人が其の肩にカンガルーの皮を背負つてゐる事もあるが、之れは單に寒さの爲めである。タスメニアの女は座る時に其の膣を何にかで被ふ風はあるが、之れは只妙な僻だと云ふ外はあるまい。

ネオカレドリヤ人やマリコロ島人などが繩だの皮片だの貝殼だのを身につけてゐるのを見るが、之れとても何等の道德的意志があるのではなく、只其の身を保護する一種の甲冑に過ぎない。嘗つて或る宣教師がニューカレドニアの娘に、結婚した女と同じやうに腰卷をするやうに勸めて、娘共の激烈な反抗に會つた事がある。

クツクと同じ船に乘つて步いた或るタイチの高貴の女が、英吉利人は何から何にまで自分の國の男と同じか何うか、自分の眼で確めたいと申出た、と云ふ話がある。しかも之れはホンの好奇心からに過ぎない。又或る宣教師がポリネシヤの大勢の女に捕つて、其の裸にならないのはきつと何處かが不具なのに違ひないと云ふので、是非見せろ〳〵と迫られて、漸く逃げ歸つたと云ふ話もある。

太平洋の諸島にも、矢張り之れと同様の風俗が見られる。亞米利加印度人中の最も野蠻なる、フユエジア人やカリフォルニア人は、何處でも構はず自分の今ゐる場所で其の性慾を充たす。人が見てゐやうと見てゐまいと頓着する事はない。

一四九八年にクリストフ・コロンブスがトリニテ島に行つた時には、男はグアユーコと云ふ狹い帶をしてゐたが、女は丸裸でゐたと云ふ。又其れと同時代のパリア海岸では娘は其の丸裸なる事によつて結婚した女と區別せられてゐたと云ふ。

## 六

最後に、こんどはもう少し進んだ二三の事實を擧げて、書き出せばいつまでも盡きない、此の甚だ所謂汚はしい記事を終る事とする。

先きにも云つた如く、ポリ子シアの諸島では、男女關係の自由に殆んど何等の制限がない。結婚した女でも、其の夫の言葉次第で、貸しもし切賣もする。そして女に羞恥とか貞操とか云ふ事が全く知られてゐない。然るにニユージーランドに行くと、女の持主が大ぶ嫉妬深くなつて、許可のない不義は必ず死を以て罰する。又其の許可するにも必ず何等かの刑罰を伴つてゐる。そして女も比較的に謹しみ深い。

歐羅巴人が其處の女を買うと思つても、女は先づ家族のもの若しくば夫の許可がなければと云ふ。それから其値段をきめて漸く其等のもの、許可を得ても、こんどは又再び其の女といろ／＼談判しなければならぬ。斯うして出來た女で、其の歐羅巴の情人に愛著して、隨分忠實に盡すのも珍しくない。男は自分の妻を貸したり切賣したりする事を他の野蠻人と同樣に、少しも不道德だと思つてはゐないが、そして其れは持物たる男の權利だと信じてはゐるが、それでも多少の嫉妬心から之れを抑へる。

## 七

佛蘭西の哲學者モンテーニュは云つてゐる。『斯く自然な、必要な、そして正しい性的行爲が、顔を赤らめないでは話されないとか、眞面目な場合から遠ざけられねばならぬと云ふのは、何う云ふ譯なのだらうか吾々は殺戮するとか、掠奪するとか、又は裏切りするとか云ふ事は、遠慮もなく口に出す。そして此の事だけは、齒の間でなければ敢て云はない。』しかしこれは、比較人種學によつてのみ解釋せらるべき、進化論的心理學の一問題なのである。

最初原始人は、自らを促迫する種々なる慾望の間に、即ち饑や戀の間に、何等の道德的區別をも設けなかつた。動物界にも全く羞恥の感はない。尤も排他的感情としての戀は、動物の中にも見出されるが、そして或る鳥類になるとやもめと死とは同意義にまでなつてもゐるが、其の一夫一婦的生涯の間に、遂ひ羞恥の何物たるかを知らない。即ち其の排他的撰擇は、敢て羞恥の感を生ぜしめてゐない。

そして人類の間に始めて此の羞恥の感情や其の他の性的道德の種が播かれたのは、自由共産の制度が廢れて、財産の私有制度が崩してから後の事である。畑や牧場と共に、女が男の私有物となつてから後の事である。男は其の私有物を蓄へて、極力他の男の掠奪を防ぐと共に、一方に於て嚴重に其の所有物の所謂不貞を處罰する。が、主人たる男には、素より不貞も何にもあつたものぢやない。斯うして奴隸中の奴隸たる女は、幾万年かの間に、全く女特有の奴隸根性を養はれて了つた。

# 藝術か戰鬪か

荒畑寒村

曾て自然主義文學勃興の當時、自然主義の理論を獨り文藝上の新運動としてのみ見ず、更に之を人生観上に迄も押し擴める時、その一切の權威を否認するの點を通して、社會主義若くは無政府主義とも相關する處が生ずると唱へられた。又一面に於ては、創作家は謂ゆる人生の眞相を描かんが爲めに、眞面目に努力もし、煩悶もした。然し不幸にして、文學者は此の眞人生を見、此の實社會を見究むるべく、余りに空疎なる學問と、余りに淺薄なる智識と、余りに冷やかなる同情としか有さなかつた。そして何よりも、人生に當面して直視するの勇氣を欠いて居た。

彼等には、何故に社會が貧富の二大階級に分れて居る乎、何故に戰爭は起さるゝ乎、何故に罪惡は行はるゝ乎、彼等が最も多く筆にした性慾の不滿、生活の困難は、抑々何に基因して居る乎、全く解する事が出來なかつた。是れやがて、その作物が屢々深刻を缺き、徹底を欠くとの非難を受けた所以である。煩悶が一頃文壇を暗くした。自然主義は行き詰つたといふ聲が、批評家の口から旺んに聞かれた。そして人生の傍観者、實際生活の逃避者といふやうな語も、また聞かれた、投げやりな、如何でもなるやうになれと云つたやうな、絶望的な、懐疑的な、虚無的な氣分や調子が、作物を強い色で彩るやうになつた。彼等は一齊に無解決を叫び、田山花袋の如きは、人生は凡て無解決であるとさへ唱へた。が、是は先にも云つた如く、彼等が人生問題、社會問題を解決するに足る組織的にして系統ある學問と、智識とを欠ける必然の結果で、また彼等に人生に對する眞面目な見解と、暖き同情心とが無いからに過ぎなかつた。勿論、中には解つて居る人も居ないでもなかつたが、そういふ人達には戰鬪の勇氣が無かつた。

やがて反動が來た。頽唐的な江戸趣味を皷吹する耽美派の流行もその一面なら、空想的神秘的な新ロマンチシズムの勃興も、亦その一面である。彼等は遠き江戸時代の文明を、美しき回顧のうす靄を透して眺め、引返す由もなき時の力を嘆きつゝ、その爛熟廢頽の空氣と匂ひとに憬れて、苦しき現在を忘るゝのである。然

らずんば、浮世は茶にして送るのが一番利口だといふやうな、片腹いたい悟りを開いて、恰かも昔の通人が遊びを論ずるが如き態度を以て人生に對し、唐棧づくめの粋なりをした若い衆が、清元の稽古にうき身をやつすが如き努力を、彼等の藝術に傾注して居る。譬へば彼等は好んで花柳の生活を描く、然しそれも矢張り昔の人情本に見るやうな、惚れたハレタのいきさつに過ぎないで曾てその生活の根本に對つて、深刻にして鋭利なる批判のメスを入れた事はなかつた。實に永井荷風君や、久保田万太郎君や、長田幹彦君や、小山内薫君が描く藝妓と、岡鬼太郎君や、田村西男君等の描く藝妓との差異は、富士見町と神樂坂との藝妓程にも甚だしくない。

彼のロマンチシズムと稱する一派も亦全じ、彼等の神秘と稱ずるものは、今日の科學が半世紀も昔に闡明し盡して、既に神秘でも不思議でも無くなつたものである。彼等の空想は、常に自個の日常生活の些々たる點にのみ注がれて、曾て社會進化の大事實の上に向けられた事が無い。實にこゝにも吾々は、嚴肅なる人生の戰場から逃避して、殻を閉ぢた貝の如き生活を送らんとする卑怯なる傍觀者を見出すのである。

要之、彼等の根本思想は全じ、即ち諦らめである。人生社會が眞實に解らない、隨つて自個の煩悶を解決すべき手段も知らなければ、他人の苦惱にも全情が出來ない。或は人生に當面して社會の眞相を直視し、不義と戰ひ奸惡に反抗するの勇氣が無い。諦らめに往かずして何處に往かう！

然るに、一面では此の餘りに實人生との交渉を没却せる文壇の風潮に對して、既に反抗の聲が上りつゝある。阿部次郎氏の如き、生田長江氏の如き、相馬御風氏の如き、屢々現今の文學的作物が余りに個人的興味にのみ奔り過ぎて、社會的興味を全然没却して居るのを難じた。馬場孤蝶氏の如きは、吾々は今迄新しい事も云つて來た、書いても來た、然しどれだけ實行して來たらうと云ひ、また個人の權威を認め、個人を解放し、言論及び思想に絶對の自由を得せしむる爲に戰ふ事を宣言しさへもした。

即ち一部の批評家は、既にかくの如く眼を開いて來たが、多くの創作家は未だに無關心と耽美との夢からさめない。彼等が江戸時代の追想に醉ふて居る時、時世は如何に先覺者の犠牲に依て進歩しつゝある乎。彼等が只管に耽美の夢を追ふて居る時、社會は如何に衆愚の努力に依て向上しつゝあるか。人爲の不正と邪曲との爲に、無智と窮乏と悲慘と迷妄との下に、民衆は如何に悶え惱んで居る乎。曾て此の大なる事實に眼を向け、筆を着けたものが無い。創作家よ、先入の偏見を去つて心の眼を開き、たぢろがざる勇氣を以て人生の眞

相を直視せよ、社會の實狀に當面せよ。諸君は現在の如く、爾く人生と沒交渉に過ぎ、社會の實際生活に對して、爾く無關心では居られなくなるに違ひない。

曾て或る文士に對つて、文學者は社會の根底、人生の眞相を、今少しく理論的に知る要があると云つたら、そんな必要は感じないと斷言した。何故かと云ふに、——その文士の理由とする處は——藝術は理論ではない、その目的とする處は説明ではない。人生の現象、社會の事相を在るが儘に觀照し、表現すれば足るからであると。

然し乍ら、社會の眞相——眞實の意味に於ける——を知る事なくして、如何してそれを描く事が出來るのである乎。現象を見、事相を知るといふ。抑も何に準據するのである乎。事相は見やう、考へやうに依て違ふ。譬へば自然界の現象に對しても、まだ何の科學的智識をも有せざる少年と、既に教育を受けた青年とは、その觀察に於て全然違ふ筈である。然らば一切の原因をイグノアし、只だその結果のみを捉へて、是れ事物の眞相なりと斷ずるのは、甚だしき迷妄獨斷ではない乎。而して現代の社會制度を構成せる所以の經濟組織に就ては、殆んど何事をも理論的に知る事なき文士が、事相現象を在るが儘に見、且つ知るといふのは、實に此の迷妄獨斷を敢てするものではない乎。文學者の考ふる人生とは、甚だ漠然たる、極めて抽象的なる語に過ぎない。個人の生涯を支配する力は、四邊の境遇、周圍の事情である。詳しく云へば、個人がその裡に生活して居る社會制度であり、經濟組織である。是を外にして、人生といふやうなものは無い。然るに文學者は、此の物質的關係はまるで度外視し、若くは全く無智識で居て、此の境遇事情から生じ、これに依て支配さるゝ個人の思想、行爲の凡てをも、或は個人の性情とか性格とかいふ者にのみ歸して居る。社會組織の欠陷の必然的結果たる人生の悲慘過誤をも、免れ難く救ひ難き超自然的なる運命の力だとして居る。

獨り創作家のみではない、社會的興味を云々する批評家と雖も、之を知つて立論して居る人は甚だ少ないと思ふ。然し乍ら、是は眞面目に考察思索すべき者の、當然到らざるべからざる歸着點であり、又、文壇の趨勢は早晩必ずこゝに到らなければならぬ。或は既にこゝに到らんとする一轉換機が、一部の批評家に依つて豫言されて居るのではあるまい乎。而して一度こゝに到つた曉は、文學者は遂に人生の戰鬪から回避し、社會を横流する二大階級の抗爭に對して、インディフエレントな傍觀的態度をとり得なくなるだらう。彼等もまた、全人類の生存そのものが、恐るべき過誤と迷妄の上に築かれて居るのを見て、之がレビルトに全力を盡すに至るであらう。

# ユットナア博士

土岐哀果

然り、『思ひ出』が、藝術として、つまらなき、くだらぬシパヰなることは、われも同意す。

ブラボウ、ブラボウ！
この聲にも、われは、さまで、學生時代をなつかしく追想せざりし。
そは、生活の喜悦を叫ぶなりといへど、いまのわれには、空虛に、無意義に、むしろ、ばからしく響きしのみ。

ただ、
かの二幕目に、
ネッカアの河波が、赤く、落日のひかりを浴び、
對岸の古城址が、五月の丘のわか草に、さびしく沈み、
その牛腹の家々に、ちいさく灯がともりて、
酒場の庭の大樹の蔭、
そよ風の、青き夜となりしとき。

老いたる博士ユットナアが、ひとり、つと、
薄闇の中に、その大きなる身をおこして、
『おお、神よ』と、空をあふぎ、
『どうぞ、わたくしに……』と、何か祈りて、
『ああ、疲れてしまつた！』と、また、
力なく、どつかりと、椅子に腰かけしを。

憐れなる、愛すべき博士ユットナア、
おんみは、——傷ましきかな、
八年間の、憎むべき沈滯と、忌はしき因襲とのために、
その尊き『自由思想』の、疲れてしまひたるなり。

おお、何といふ事ぞ！

老いたる博士よ。
その、新しき部屋を檢分して、いで來れる公子は
おんみの肩をゆすり、
ブラボウを叫びながら、いで來れる學生は、いぶかしげに、ランプを捧げて、
おんみの顏をのぞけり。

ウ、ウ、ウ、ウ、ウ……
おんみは、されど、覺めんとせず。
いびきは、ますます高し。

おお、わが敬愛する青年よ、
この老いたる博士を呼びおこすなかれ。
しづかに眠らしておけ。
しかして、
聞かずや、その、
疲れてしまひたる『自由思想』のいびきの悲しみを。
げに、『思ひ出』は、見ずともすむべきシバヰなれど、
ただ、この一情景のみは、ふかく、はた、しづかなる涙を、
わが胸に流さしめたり。
東儀氏は上達したるかな、――
われは、その、どつしりとして、暗示的なる氏の藝術に、敬意を表す。

# 晝の街路にて

上山草人

空は己れの爲めに晴れて居る
己れの爲めに空は青光を張つて居る
女は己れの爲めに街路を歩んで居る
若い女は等しく己れを顧みる
パラソルも、前掛も、足袋と鼻緒も、
己の心には醪の泡となつて浮上る。

此の泡をざれ歌にして
懷手のまゝ
ふり仰ぐたびに空へ書き度い。

左樣したらこの腕白は、
途の半町と行かぬうち
貴い天上の御草紙を
縱橫無殘に書き潰すだらう。

## 夜の街頭にて

此の寢沈まれる市街を支配する
天上の舞臺監督（ステージ・メネジヤー）よ。

途方もない願だが
今、
君の警笛を鳴して、すさまじい暗轉（ダークチエンジ）をやれ、
壁も扉も天上も
有ゆる夜具、衣布（きぬきれ）の類も
立所に天上の倉庫に跳ね上げ
極度の白光を
人の子の寢姿に射かけよ。

そして白魚のはねる樣な
ほんとに美しい
裸體（はだか）の群（むれ）を見せて吳れ。

## 活字

とりすますな女、
器用にページを飜（か）へす時
珊瑚色の指先から
ふくよかな腕を傳つて
簇々と、簇々と、
それ、這込むものがある
脇の下から乳房まで。

## 目へ

はい、御免なされませ
燒火箸を上げまする
あなた樣の鼻毛だらけな
不正形（いびつ）の鼻穴へ
目へ、目へ、目へ、
燒火箸を上げまする。

# 青鞜社講演會

榮

## 一

二月十五日、青鞜社の第一回講演會を聽きに行つたので、二三の辯士の論旨に、一寸批評を試みる。

生田長江氏は新しい女の意義を二ッに分けて、第一に、舊時代の舊思想と舊生活とに不滿足な男女の中の女、第二に、婦人として從來の地位に不滿足な即ち男子に對して同等の權利を要求する女、としてゐる。これには大體に於て異存はない。

處が其の次ぎに、男子と同等の權利を求めるとは、平等を要求すると共に差別を與へる、即ち婦人特殊の貢獻を社會に與へんが爲めである、と云ふのは何う云ふ意味なのだらうか。

社會に自己特殊の貢獻を爲す事は、何にも新しい女に限つた目的ぢやない。誰れだつて左樣でなければならぬ筈なんだ。只一般の場合に問題とするのは、其の特殊のものと云ふのが何にか、と云ふ事に在る。そして此處では、男と女との貢獻を、何故に又如何にして、殊更に區別するかと云ふ事に在る。

僕は氏の議論が、遂に一歩も其處に踏入らないで、甚だ不徹底なものになつて了つた事を遺憾とする。

## 二

岩野泡鳴氏の演說は、實を云ふと、何にが何にやら殆んど忘れて了つた。此の人の講演中に、僕の興味が、すつかり外へそれて了つたんだ。

演說の半ばに、傍聽席から一人の紳士が飛び出して、いきなり演壇の上に登つて行つて『君はたび／＼細君を取りかへるさうだな』と云ふやうな事を怒鳴り立てた。そして泡鳴と取ッ組み合つて、とう／＼演壇から押し落された、傍聽席では拍手喝采止まない。

此の紳士は、實はメシヤ佛陀事、宮崎某と云ふ神樣だ。泡鳴氏は半獸主義の獸だ。そして傍聽人は多分人間だ。僕は何んだかむしやうに面白くなつて了つた。

しかし泡鳴氏の論旨は、大ぶ元氣のいゝそして餘程粗雜なものであつたらしい。何んでもおしまいの頃に、夫に不平な妻は、將來の生活などに心配せず、どん／＼家を出るがいゝ、そして男も亦、思想や感情の合はない妻は、遠慮なく逐ひ出して了ふがいゝと云ふやうな事があつたやうに記憶してゐる。

之れに反して同夫人の岩野清氏は、婦人の思想の獨立と生活の獨立とを並べ論じて恐らくば當日第一の大雄辯を奮つた。清子女史は、嘗つて社會主義婦人等と共に、治安警察法第五條の廢止を、議會に迫つた當時の一戰士であつた。

## 三

馬場孤蝶氏があすこ迄の議論を公けにしたのは、或はこれが始めてぢやあるまいか。

今日女が男に壓倒され、又多數の男が少數の男に壓倒されてゐるのは、要するに、組織せられたる力が、組織せられざる力に打克つてゐるからである。そしてこれは今日の財產制度から、よつて起つて來た事である。所謂新しい女が、文藝の方面に、力を盡すのも惡るくはない。けれども其等の事以上に、もつと實社會と接觸して、此の根本原因と鬪ふ覺悟を持つて欲しい。

僕は孤蝶氏の此の論旨に對して、更に附加ふべき何者をも持たない。

## 四

最後に、四月から開かれると云ふ、青鞜社研究會の事に就いて、青鞜社の諸者に一言を呈したい。

『婦人が自己を開發して行く上に何の機關もなく、何の便宜も與へらてゐない今日』『婦人自分が自分で自分を教育する爲めに何等かの道を開き、方法を講ずる』と云ふのは、至極賛成する。

けれども僕は其の研究科目を見て、實はすこぶる失望して了つた。殆んど全部が文藝に關する事ばかりぢやないか。

『對社會問題よりも各個人を教育する事』が第一だと云ふが、個人の教育は文藝にのみ據るものだらうか。自然科學が一として研究科目の中に入つてゐないのは何故だらう。經濟學や經濟學の智識がなくつて、あの科目の殆んど大部分のものを、又社會の實相を、本當に理解が出來ると思つてゐるのだらうか。文學者の社會學や文明史を聽いて、それで滿足が出來るのだらうか。

歐米に於ける婦人問題の理論や運動の研究は、泡鳴氏の刹那哲學などよりも、餘程必要なものぢやあるまいか。

## 物を食ふ事を恥づる人民

利　彦

■一旅客の語つて曰く、印度山中の蠻族中には、物を食ふ事を恥とする一社會あり。■彼等も亦一般人類と同じく食事を以て必要なりと認む。然れども彼等は之を已むを得ざる害惡なりと稱せり。彼等の大目的は惡德を地下に驅逐するに在り。此村の大通りには決して食物店を見る事なし。然れども町はづれに至れば、村民が暗夜窃かに行きて食物を買ふ處あり。

■斯く食事を恐るゝこと甚だしき社會に於ては、貪食の風などあるべくも想はれざれど、事實は其反對にて、大食、過食は寧ろ他處よりも甚だしきものあり。一般人民の思想は殆んど食ふ事のみにて占領せられたり。少年數人相集る時は、必ず食事に關して馬鹿話を爲す。若し學校の敎場にて、極めて遠まはしにも食物の事を聯想せしむるが如き文章ある時は、級中生徒は必ず皆な目まぜして微笑するなり。

■而してそは決して少年のみならず、大人も亦皆な同じ。彼等は常に食物の事に關してみだらなる話を爲し、其夢すら絶えず此の思ひに依りて掻き亂さる。彼等は實に其胃が顚倒せるかと思はるゝばかり食り食ひ彼等の身體は實に此の食事の爲に精力を過費するに依りて衰弱せり。又彼等は食物の不良なるが爲に多くの疾病を有せり。總て食物の供給が暗所に於て行はるゝが故に、譬へば彼の禁酒國に於ける酒の賣買の如く其質甚惡しくして且つ種々の不秩序を伴生す。而して之れ賣る者は何時警官に引致せられて所罰を受くるやも測られざるに依り其の危險を償はんが爲に其價甚だ高し。

■されば食物を賣る者は當然最下級に屬し社會に於て好他位に立つこと能はず。されど彼等は又善く世の地位ある人々に酬うる所以を知れり。彼等は良家の青年を其の食物店に導き、飲酒賭博を敎へ、種々の惡習に染ましめ、其身心を荼毒し終る。

■事情斯くの如きが故に、其社會の善人等は常に此の社會的害惡を除去するの法を講じ、一層深く此の惡德を地下に埋めんと欲し、絶えず食物店の主人を警察署に引致して罰金を課し、到處の敎壇に於ては絶えず食事を爲す事の不德なる所以を說敎すれど曾て其効ある事なし。――『直言』より――

# 新刊紹介

## ■社會主義倫理學

『人間が社會的に其の衣食住を生産するには、知らず知らずの間、必然的に或種の關係を作る。其の關係は則ち其の社會に於ける物質的生産力の發達程度に相應ずる生産關係である。此の生産關係の總和が社會の經濟的構造、則ち眞實の基礎を爲す者で、此の基礎の上に、法律的及び政治的の上建築（ユーベルバウ）が組立てられ、又之れに相應して或種の社會的自覺が生ずる事になる。』

此の唯物的史觀說は、マルクス自身も云つてゐるが如く、歷史の一導線（ライトファデン）である。しかも最も主要なる一導線である。此の條件でゐる間、此の史觀說も甚だ有力なものであるが、それを外れるとすこぶる滑稽なものになつて了ふ。そして兎角社會主義者の間には、此の誇張者が多い。

カルル・カウツキー著『倫理と唯物的歷史觀』（堺利彦譯『社會主義倫理學』は、此の一導線によつて、過去の諸倫理學說と諸道徳行爲とを批判し、更に進んで其の史觀說獨特の道徳理想を闡明したものである。

第一章『古代及び基督教の倫理』は、哲學史上何故に倫理問題が波斯戰爭の直ぐ後に起り、此の個人生産時代に於て何故にエピキュラス派とプラトン派と相對立して、其の中間にストイク派が現はれたか、そして又何故に、此の後の二者が要素となつて基督教を生じ、遂にエピキュラス派の唯物論を征伐して了つたかを述べ、其の間に神の思想の進化や、二重道徳や、倫理と道徳の關係に論及してゐる。

第二章『啓蒙時代の倫理』と第三章『カントの倫理』とは、十八世紀以來の資本家制度の發達と共に、如何にして新科學たる經濟學が起り、又何故に佛國には革命的唯物論が起り、英國には唯物論と基督教の調和論が起り、そして獨乙には極めて深邃なる抽象的哲學が起つたかを說き、所謂國民性論者の蒙を啓いて、詳細にカント說を批評しつゝ、遂に唯物論と唯心論の論點たる『自由と必然』とを論じ、併せて近時何故にカント說が再び頭をもたげて來たかを述べてゐる。

第四章『進化論の倫理』と第五章『マルクス派の倫理』とは、一切の超自然的解釋を排除して、社會的本能によつて道徳法を說明し、生産關係によつて道徳理想を決定した、本書中の本論とも云ふべきものである。

論旨極めて徹底、譯文も亦極めて明晰、到底ブールジョワジーの學者輩に望む可らざるものがある。

最後に猶僕は、此の唯物的史觀論自身の爲めに、一言辯じて置く。

『人の自覺に依つて其の生活法が定まるのでなく、其の反對に、人の社會生活に依つて自覺が定まるのである。』けれども此の自覺が社會的生活の上に反動する事も亦大きい。されば此の書の著書も、强力や思想の差異を史觀說から排斥してもゐるが、一面には亦、『道徳的規範を理解するには、それを呼び起した社會的要求を知るのみならず亦其の社會の特殊なる思想を知られねばならぬ、生産方法は決して其の當時の特殊なる器械と特殊なる社會關係とのみによつて決せられるものではなく、亦其の特殊なる智力と特殊なる因果の推理と、特殊なる論理と、即ち之れを一言にすれば其の特殊なる思索法は依つて決せられる』と云つてゐる。（譯書二一一頁及び二一六頁參照）

之れを要するに、此の新唯物論は所謂たゞの唯物論、即ち死んだ唯物論ぢやない。

從來よりも一層善く歴史を説明すると云ふだけぢやない。此の史觀説によつて始めて道德理想が闡明せられると云ふが如く、亦實に從來よりも一層善く歴史を作るに足るものである。斯くして社會主義の物質論は一躍して絶大なる理想論となる。(榮)(金壹圓丙午出版社)

■The Pilgrimage

『東海より』以後の作を集めた英詩集で、數年前ロンドンのエルキン・マシユウから出版されたのを、更に日本で刊行したのである。此の詩集が初めて英米の文壇に現はれた當時、批評家は著者をバエレーン、或はホイスラーに比して激賞したといふが、實に此の自由な、可憐な短詩の中には、捨て難い趣きのあるものが尠くない、殊に"Autam Song"と題する詩の"The ghost cast'e of glory is built by the sad magic of Time"といふ一句の如きは、忘れ難い印象を殘さしめた。アーサア・ランソム氏はソオートナイリー・レヴユウで氏の詩を評論し、初めはヨ子・ノグチといふ語が一種の好奇心を惹いたが、然し其好奇心は單にナショナリテイといふものよりは更に尊ぶべき實質即ち此の詩人の天才といふものに向けられて來たと云つて居るのは、蓋し至言であると想ふ。(此の九頁に亘る論文は本書の卷末に掲げられて居る)殊に吾々が記臆せざるべからざるは、氏が單に片々たる詩人たるに止まらず、曾て故馬場辰猪氏が海外に在つて遙かに故國の政治を鞭撻し、社會を指導せるが如く、今や氏は日本に在つて遠く英米の文壇に、常に日本の思想界を紹介し鋭利にして透徹せる批判を加へつゝあることである。(寒)(定價金一圓、京橋區南傳馬町三東雲堂發行)

■無益の手數を省く秘訣

米人フレデリツク・ウキンスロウ・テーラア氏の著『プリンシプル・オブ・サイエンテイフヰツク・マチーヂメント』を、池田藤四郎氏が飜譯して、黄色叢書第一篇として東京魁新聞社より出版したものである。サイエンテイフイツク・マチーヂメントとは、要するに表題の示す通り『無益の手數を省け』といふ事で、一つの仕事をするにも、出來るだけやり易くする、直接仕事に効果を齎らさない手數の爲に勞力と時間とを消費するのを省いて、出來るだけ多く仕事をし出來るだけ多く金を儲けるといふのだ。譯文には一種の趣味があつて、讀み出すと覺えず釣込まれて讀了してしまふ。僕は此の書に依つて此の方法を工場なり、會社なりに實行しやうとする資本家に望んで置く勞働者をして無益の手數を省かして、僅少な時間の中に多量の仕事をさして、そして余計に金を儲けるにも拘はらず、若し勞働者に多くの賃銀を拂はなかつたならば、無益の手數を省かなかつた時よりも猶惡い狀態に陷つて了ふ。宜しく『制限なき勞働の力』と題する項目を熟讀玩味して、何よりも勞働者が一番大切だといふ事を知り給へ。(寒)(二百余頁、定價金十錢、麹町區有東町一の三東京魁新聞社)

■次號報告■

婦人解放の悲劇(評論)…大杉 榮
卑怯者の文學(評論)……荒畑 寒村
社會學の一節(研究)……ウォード
未定……………………上司 小劍
題未定(創作)…………安成 二郎

# Blank Mind.

佐藤緑葉

わが胸をして、
常に拭きたる黒板の如くあらしめよ。
われは休息を欲す。
何ものにも亂されざる入江のごとく、
また日をうけて眠りたる都會の甍のごとく、
靜かなる休みよ來れ。

煩はしき女よ、
わが胸を安らかならしめざる美くしき者よ、
とく消えよ、
鹽酸をそゝがれし鉛のごとく。

わが胸をして、
靜かなる冬の日の如くあらしめよ。
何ものも入るなかれ。
自由に青き大空を吸ひ、
妨ぐるものもなき平和なるわが胸に、
何ものも忍び入るなかれ。

不快なる多くの顔よ。
重くるしき挨拶よ、作りごゑよ、
とく去れよ、
われをして縱まゝなる日に殘せ。

わが胸をして、
われ一人の勝手なる空想におけ。

## 爪の垢

けふも不快なる一日なれば、
あすもまた不快なる一日ならむ。

下駄の齒にはさまりし石、
二分ほどにのびしひげ、
爪の間にくろ〴〵と入りし垢。

氣にさはる給仕のあくび。

わが心はつめたく泣き出さんとす。

## 断片

子供の時から何でもためにならぬものが好きだつた、そして今でも。――

學校の書物をよむのはきらいで、
繪草紙や少年雑誌に讀み耽るのが好きだつた、
頭痛のするまで、夕飯の時間を忘れるまで。

講談物のおもしろさ。
田舎芝居の皆鶴や八重垣姫にうつゝをぬかし、そして自分を、世に稀な秀れた者と思ひ込んだ。

なまけもの。――
仕事がきらいで、時間を浪費するのを好み、のらくらと、何もせず日を過ごす。

そして今でも、
世の中のためにならぬ事、自分勝手に日を送る。



## ドリイマアよ

荒畑寒村

ドリイマアよ
汝の夢はブルジョアシイの青年の如く
倦怠より生ずる煩悶の奢侈に耽りて
煤煙の底に刻苦せる勞働者あるを知らず
夜の街のペーブメントに横へられ
錢を乞ふ餌となれる少兒あるを知らず
また輕薄なる藝術を論つらひて
如何なる思潮の民衆の胸奥に横流し
如何なる運動の社會の下層に育成せるかを知らず
その祖先の如く隣人の勞力を掠奪して
淫蕩と放恣の生活を望む類ひに非ず

また彼の少數を誇るインテレクチユアルスの如く
夕陽に背きて耕やせる農夫を見ては
決然としてレヴオリユシヨナリイに投じ
饗宴と舞踏と夜會の生活を抛ちて
『人民の間に』往ける露國青年の心情を解せず

個性の自由を稱へ新しき思想を口にすれど
猶三千年來の卑屈と服從の生活を繰返す
實行の勇氣なく反抗の精神なく
遊惰と饒舌との殼に閉ぢ籠りて
幾度か獄に投せられて且つ屈せざる
リバアタリアンを冷笑するものに非ず

また彼の無智なる宗教家の如く
世を擧げて待ち望める眞の救主を知らず
パンを求むる者に石を抛ち
魚を乞ふ者を蛇に嚙ましめ
曾て理性の批判の斧を入れず
また近代科學の光に照さしめざる
暗黑なるドグマの深林に潜みて
迷妄と輕信より生ずる幻想に慄き
自ら世の終り來れりと叫びて
却つて新時代の曙せるを悟らざる烏滸
に非ず

また彼の優柔なる詩人ばらの如く
神經の鋭敏と感覺の强烈を誇りて
いと容易くも泣く事をすれど
人爲の不正に苦しめる同胞の
胸打つを見て心を動かさず
笛吹くを聞きて涙を誘はれず
ひたすらに詩の價の高くして
夜毎に甘き肉の幾皿と
佳き酒とに事欠かざらんを願へる
冷たく賤しき夢の比に非ず

ドリイマアよ

されど汝の夢は彼等の何ものも
近づき難き嚴肅なる事實なる哉
汝の夢は冷靜なる理性の
批判と觀察との上に置かる
汝の夢は眞理に對する從順と
自由を愛する熱情と
不義に反抗する勇氣の上に築かる
汝の夢は人類の光榮、科學の美果なり
そはキリストが求めし天國
モリスが描ける理想の鄕
人、人を奪はず、治めず、虐げず
自由と平和とソリダリテイの下に
幼兒獅子と眠るアナアキイの社會

# 惑星旅行 (一)

ラッファロキッチ作
安成貞雄譯

諸君、君等は是迄、夜、窓框に其兩肱をちやんと突出てゝ、(丁度ラッフエルの繪畫の中の小さな天使の樣に) 寂として光り輝きつ無邊の夜の大空を運行する星を眺めた事があるか? 飛行船の今日でも、吾々はまだ此の迷へる子供等に達する事に成功して居ない。けれども、吾々がそれ等に達しないにしても、それ等の住民は確かに吾々を訪問する、何故つて、其の住民は吾々以上の智惠を賦與されて居るからだ。彼等は吾々がまるで知らないとを知つて居る。

先頃、或日の午後、僕は野原でたつた一人で二人の人間――人間とは其外見からして殆んど云ひ難いが――と一所になつた。二人は忽然僕の前に立つて低い調子で、穩かな聞きなれない如何にも音樂の樣な言葉を叫いた。けれども、言葉は全く喝聲であつた。談話は御互の思想を眼の色で讀んで濟すものらしく、其口から洩らす言葉は、僕を見て覺えた烈しい驚愕のほんのしるしであつた。『實に妙な奴だなア』と僕は思つた『奴共まるで月から墜落つた樣だ!』

後で知つたが、全く其通りであつた。二人は何處か月の方の、ほんの數百哩先きから來たのであつた。でつかい頭、南ケンシントン博物館に藏してある古木の切株に比敵する程でつかい頭、吾々のゝよりも心持長いがよく釣合のとれたぐにや〱した頸筋、瘦せて短い腕、吾々のよりも、ずつと小さい胸壁を想像し給へ。脚は短く、太くつて、無格好だ。着物と云つては、絹に似た材料の半分体に引つかゝり、半分はぶわ〱して居る一種の羽織然たるもの丶他には何んにもない。一毛一爪も身体にない。たゞ、其眼(眼に就いて話しするのを忘れて居た)――眼たるや驚異すべき

ものて、心の動く毎に色が變化し、灰色より綠に黄に、青に、非常な速度を以て移つた。物を言ふ代りに、彼等は互に其眼の思想を讀んだ。

眼閃を交換した後、一人が、私の解し得ない言葉を、大變諧音的に話しかけた。僕は自分の國語で返辭をしやうと口を開いた。けれども彼等は其時を與へなかつた。一人が、一本の樹を指して或る言葉を言つた、僕は其英語を授けた。其思付きを見貫き、且つ語彙を集めやうとするのを覺つたので。僕が英語で言ふ言葉はも一人の仲間によつて、精確に反覆された。そして、すぐ吾々は談話を交換するに十分の言葉を有するに至つた。

二人は進んで質問した、僕は答へた。僕の方でも好奇心を宣明したが、吾が話相手は喜んでそれを滿足させて吳れた。かうして僕は、二人が大いさ吾が地球に七倍する一惑星から來たことを知つた(二人は宇宙一切の天体を知つて居た。二人は火星へ科學上の使命を帶びて行つた歸途で、一寸吾々へ立寄つたのである。吾が地球は、彼等の言葉ではナダ・サメーラ "Nada Sameyra" ――其發音を出來るだけ摸して見ると――と呼ばれて居る。そして、二人の會意的身振から推して、此の言葉は『狂氣の定期的發作に罹れる人間の國』を意味する事を了解した。僕はひどく悅に入つた。

と云ふのは、此の二個の生物が僕には狂人と見えたから。(二人が僕を正氣だと思つたとしたらどうだつたらう！)彼等が如何なる方法によつて吾々の歴史を知つたか僕はわからない。また議論に熱中した時、一人が吾々の直後の未來に關して或るヒントを洩らしもした。けれども、其の云つた事は、僕がそれを生き物には洩らすまいと思ふ程僕を喜ばしめた。

靈魂の問題を論ずるや、僕が靈魂の何物たるやを理解させ樣とした時、二人は非常に驚いた。わつわつて、何んと云ふ笑ひ方だつたらう。そしてひよつと少し離れた所に、兎が交尾して居るのを見つけて、――『サメーラ』とまた言つた。

其言葉が僕を腹立せた。けれども、其後も幾度も聞かなければならなかつた。僕の新しい友人が、一日間自分の國へ案内しやうそしてまた送り還してやらうと云つて吳れた。僕のポケットにあるものは殘らずそこへ置いて行かなければならなかつた。それがすむと、二人は僕を挾んで、一躍すると吾々は空間を橫ぎつた――惡魔がどうしてやるのか僕にはわからない。肉體的感觸は諸君が二片で地下鐵道の昇降器で經驗する感覺と稍々似て居る。精神的感觸に至つては、僕之れを想ふに、トロイ人の爲めに戰車に乘せられて運び去られた時、美姬エレーヌによつてか、若しくは何時

がは其父に代つて日の馬を馭せんと望んだ僭妄不遜の若者によつてか感ぜられたと全く同じものであつた。けれども僕は無事に丈夫で惑星へ到着した。二人が第一に僕に見せたものは、獸苑か動物園の一種であつた。僕のと似た着物を着た二人の——僕と同種の——人間が道具の豊かな住み心地の好さ相な、けれども見物人が見られる様に鐵格子作りの硝子を嵌めた部屋で、コクリ〳〵とやつて居た。惑星人は僕を勸めてこの人間へ言葉をかけさせたが、——アラス！——一人は『獨逸國（ドイツチランド）』と云つた。も一人は『今日（ボン）は、英國の方（アナングレー）』と云つた。奴さん、可哀想に協商（アンタント・コルデアル）の事は知らないと見える。其隣りの同じ様な部屋には、大きな猿が一番（つがひ）身をほじつて居た、次ぎに、張紙をした部屋、張紙には、僕の友人が『雌サノーラ、斃死、地球即ちナグ・サメーラ產』と云ふのであると說明して吳れた文句が書いてある。彼女は英國人か、さもなければ米國人か、でなければリベリラの黑人であつたに相違ないと云ふのは彼等は、硝子箱の下へ叮嚀に保存してあつた襤褸を見せたが、それには若干の英語が書いてあつて、彼女が其國語を用ひた事を示して居るからである。それはシエレーの瑰麗なる詩句

"Far, far away, O ye
Halcyons of Memory !"

であつた。

僕が讀んで居る間に、人だかりがして來た。そして僕は巨大な頭が澤山並んだのを見ると可笑しくつて堪らなかつた。向ではまた、僕のの小さいのに吃驚した。とう〳〵其中の一人が僕の方へやつて來た、そして僕が生れて始めて聞いた最も立派な英語で言葉をかけた。

此の國の人間は人種的偏見を少しも有つて居ない。其男が云つたが、彼は博學な博物學者と、シエレーを知り、此の異鄕の土となつた氣の毒な婦人との間に出來た子であつた。たゞ彼の母は、彼れを產んで亡くなつた。全くの所、僕の見地からすれば、彼は其儕輩より少しは醜惡の度が少なく、吾々が人間の化物と云ふのに似た位のものであつた。彼は第一流の博言學者の學校にあつて外國語を學び、火星、金星、木星、其他英語を入れて十二三種の國語に通じて居た。彼を甚だしく驚かしたのは、此等の惑星にはそれ〳〵統一的言語が行はれて居るのに惑星中最小の吾々にあつては、それが幾百種もあると云ふ事であつた。僕は、彼に『バベルの塔』の悲運なる冒險を說明するに努めたが、彼は、面と向つて僕を冷笑した。すると、二人の周圍に立つて居たものが皆、彼の笑ふのを見て。サメーラ！と叫んだ。（未完）

# 怪物

コロレンコ作
大杉榮譯

クテシプは上の方を見た。そして恐怖に其の心を捕へられた。オリンピアの神々の大きな暗い影が、山を蔽ふて、道を塞いで寄集つてゐる。太陽の最後の光線が、霧深い雲の上を今一度閃いたかと思ふと、もう弱い記憶のやうに消え失せて了つた。そして轟き渡る雷の音と共に、夜は到處に擴がつて、いろ／＼な暗い影が空中（そらぢう）にいつぱいになつた。クテシプは、雨雲を頭に被つた全能のゼウスの神が、其の眞ん中にゐるのを見た。年老つた神々の憤怒の影が、いらたゞしさうにぞよめいて、其の周圍に集つてゐる。そして夕方遠くの方へ飛んで行く鳥の群のやうに、大風に吹き拂はれた塵埃のやうに、北風に吹きさらはれた秋の木葉のやうに、民衆歸依の無數の小な神々が、大きな長い雲の上に列なつてゐる。

ゼウスの神の雷が野の上の方に轟いた。そして其の轟毎にこれに應じて、大きな岩が長い間唸り慄えてゐた。やがて電の閃が消えると、急に濃い暗になつて、怖ぢ／＼した下の方から、低いうめき聲が聞えて來る。多分あの鐵の鎖につながれたチタンの神がゼウスの神の打擊に、地の底の方で唸つてゐるのだらう。

やがて雲が上の方から動き出して、氣味の惡い恐しさが地を蔽ふて來た。クテシプは地べたに倒れて了つた。あとでクテシプの白狀した處に據れば、此の恐しい瞬間に、其の心はおぢけ恐れて小さくなつて了つて、そして其の上に益々強く怖氣が壓つかぶさつて來るので、其後は何にが起つたのか、又其の結局が何うなつたのかも、皆んな忘れて了つたとの事だ。

只彼れは聞いてゐた。

あらゆる自然が硬くなつて沈默してゐる裡に、二ッの聲が聞える。其の一ッは嚇しつけるやうな強い神の聲で、そしてもう一ッは、山の坂の方から風が持つて來る、弱い人の聲だ。

雲の中からの聲が云ふ。

『お前が、あの僅かばかりの智識を誇つて天地の神々を罵つた、あの傲慢なソクラテスか。一体吾々オリンピアの神々程、快活な、明智な神とてはなかつたのだ。それに今吾々は、地上に不信と懐疑とが漲つてゐる爲めに、もう久しい間、斯うして夕暗の中に日を暮して居る。だが、今日此のアテナ民の間に汝の不埓千萬な言葉が聞え出した時程、こんなに霧が濃くなつた事は、まだ一度もない。何故汝は父の遺言に從はないのか。汝の父のソフラニスコは、尤も若年の頃こそは、敢て輕い嘲弄を宗教に犯しもしたが、それでも猶時々には

其の犧牲（いけにえ）の香が、私の鼻を喜ばしたものだ。』

『一寸お待ち下さい、ゼウス！』ソクラテスが云ふ。『それよりも先づ私の不可解事を解決して下さい。それともあなたは、眞理の探究よりも、卑劣な僞善をお撰びなさるのですか。』

　ソクラテスの言葉が終るや否や、しばらく大岩は、鳴りしきる雷の轟に打慄えてゐた。が、やがてあらしの呼息（いき）は遠い峽間へ飛んで往つて、あたりは靜寂に歸つた。只山の坂だけは空のゼウスがまだ憤怒に慄えてゐるので矢張り打慄えてゐた。

　ゼウスの嘲ふやうな聲が響いた。

『何處へ行つたか、傲慢な物乞奴！』

『私は此處にゐます。もとゝ同じ此處にゐます。あなたのお答さへあれば、いつなりともおん前に出ます。私はお答を待つてゐるのでございます。』

　雷が雲の中で唸つた。丁度猛獸が、きつい眼光をして素手で進み寄つて來る、リビアの獸使の勇氣に驚いたやうに。暫くして高い聲が響いた。

『あゝ、ソフラニスコの子よ、汝は地上であれ程に懷疑を擴めたのに、まだ物足りないで、此處オリンピアにまでも、吾々を暗い雲に取卷かせやうと云ふのか。嘗つて汝が廣場やアカデミーや浴場などで演説した時、既に地上のあらゆる祭壇が打壞されて、其の廢趾の塵が、此處天上にまでも飛び散つて來たやうに思はれた。それでも足りずに此處へ、私が面前へまで來ても、猶不死の神々の力を認めないのか。』

『ゼウス！　あなたはお腹立ちのやうですが、しかし誰れが私に此の天才を贈つたのですか。誰れが、私の生涯の間、絶えず私に眞理を求めさして私の心を騷がしめたのですか。』

　雲の上では暫く神祕な沈默が續いた。

「それはあなたではなかつたのですか。あなたは今默つてゐらつしやる。で、私が其の事を申上げて見ます。此の神性はあなたから賜つたものでせうか、それとも他のものから與へられたものでせうか。若しこれがあなたから賜つたものだとすれば、私は今それを、私の生の熟した實（み）として、あなたの落した火の子から出た焰として、私の捧物として、あなたに差上げます。さあ、ゼウス、私はあなたの賜物を保存して置きました。私の魂の最も沃肥えた一隅に、あなたの種を成長させました。これがそれであります。私自ら私の生のきづなを斷切つた時、私の最も困難な瞬間に燃えた、私の心の火であります。何故あなたはこれを受取つて下さらぬ。何故あなたは、惡教師のやうに、子供がいひつけ通り綴

の上に書きつけたのを、老眼の爲めに見えないで、怒るやうな事をなさるのですか。私の心の中に、神意の最初の光が入つた其の時から、私の一生の間輝いてゐた此の聖火を、私に消して了へと命じなさるあなたは、果して何者でございませう。わしが上を行くから、お前達は消え失せろ、などゝ日は星に云ひは致しません。日は默つて上を行きます。そして星の弱い光は、限りもなく强い日の光の中に消えて了ひます。又晝は松火に向つて、わしの邪魔になるからお前は消えてろ、など、云ひは致しません。晝が輝けば輝く程、松火は光を失つて、只僅かにプス〱と燃るのみであります。私が行かうとする神樣は、懐疑を恐れるやうなあなたぢやありません。私の神樣は、日のやうに、晝のやうに、何んの光をも消さしめないで、そして自ら光つてゐます。あゝ、誰れが私に云つて下さるのでせう、さまよへるものよ、汝の松火をよこせもう汝にはそんなものは要らん。私はあらゆる光のもとなのだかと。噫、誰れが私に云つて下さるのでせう、汝の小さな懐疑の捧物を祭壇の上に置け。私にはそれを解決してやる力があるのだかと。噫、これが、私の、私の求めてゐる神樣なのです。若しこれがあなたならば、どうぞ此の捧物をお受取り下さい。何人も其の子を殺すものはありませぬ。私の懐疑は眞理と云ふ永遠の靈から生れたものでございます。」

暗い雲が天の火の爲めに、端から端に切れ切れになつて了つた。そして恐しいあらしのやうな叫聲がして、再び力のある聲が響いた。

『汝の懐疑と云ふのは、何にを目途（めあて）にしてゐるのか。地上の道德の最も美はしい飾なる謙遜を忘れた、汝、傲慢なる學者よ。汝は懐疑の砂漠の中に入る爲めに、眞率な信仰の避難所を立去つた。汝は生きた神々の見棄てた、此の死んだ廣野に來た汝の如き微々たる虫けらが、憐れなる否定の塵の中を這ひくゞつて、それで此の砂漠を通つて行けるつもりなのか。汝は世界を復活さす事が出來るのか。汝は、汝が祈禱する事すらも知らない、知られざる神性を理解する事が出來るのか。破壞せられた祭壇の塵に汚れた、汝、微々たる虫けらよ汝は新しい敎會を建てやうとする建築師か。汝は舊い神々を棄てゝ、そしてまだ新しい神をも知らずに、何にを汝は望んでゐるのか。懐疑の避く可らざる永劫の夜、これが汝の世界だ。眞率なる心の避難所たる生きた信仰の世界を死の混沌に變へて了つた、あゝ、汝、憐れなる虫けらよ。

何處へ失せたか、傲慢な學者！』

あらしは獨り此の廣野に強く鳴り騒いでゐた。が、やがて雷も靜まつた。風も其の翼を疊んだ。そして只塵埃の川が、靜める事の出來ない悲哀の水面で地を蔽はうとして、止めどもなく溢れ出る

涙のやうに、暗の中に注いだ。

クテシプは思つた。もう其の川がソクラテスを沈めて了つて、不斷の質問に馴れた其の大膽な聲も永久に默して了ふ事だらうと。けれども暫くして、再び其の聲が、前と同じ場所に響いた。

「ゼウス、あなたのお聲は、あなたの雷よりも、餘程利目がございました。あなたは私の混亂した心の中に、もう長い間私の心の中に響いてゐた、そしていつも堪へ得られない悲哀の重荷の下に其の力を失つて了つてゐたものを、投げ入れて下さいました。私は眞率な心の信仰が住つてゐる避難所を立去りました。私は生きた神々のゐない、何處までも／＼懷疑の夜で蔽はれた砂漠を見ました。けれども私は、何の恐るゝ事もなく其處へ入りました。私には、私の神性たる、私の天才が光つてゐます。

ゼウス、私に此の問を說いて下さい。あなたの祭壇の上に香がたかれてゐるのは、それは生を與へるもの、名によつてゞはありますまいか。あなたは他人の善を奪ふのです。眞率な信仰の崇めてゐるのは、あなたではなくつて彼れなのです。眠る事なき懷疑の求めてゐるのは、あなたではなくつて彼れなのです。私は建築師ぢやありません。私は新しい教會の建設者ぢやありません。私は將來の信仰の立派な建物を、地から天に建てやうと云ふものぢやありません。私は破壞の塵で汚れたこわし屋です。けれどもゼウス、私の良心は、私に斯ふ云ひます、こわし屋の仕事も亦教會には必要なものだと。そして淸められた場所に、惠み深い、立派な驚く可き建物が建てられやうとする時、そして其の中に新しい信仰の生きた神々が住はうとする時、私は其處へ行つて斯う云ふのです、私は否定の塵の中を絶間なく這つてゐたものですと。

私は霧と塵とで取りかこまれて、地から外へ眼を上げる暇もなかつたのです。そして私の智識の中には、將來の建物に就いての夢が、僅かにぼんやりと描かれてゐるに過ぎません。

ゼウス、あなたは私をうつちやつてお了ひなさるのですか、正義しい、眞理の、そして威嚴いあなたは。」

雲の中は驚く可き沈默が支配してゐる。ソクラテスは更に聲を強めて續いて云ふ。

『太陽の光線が汚ない池の上に落ちる。すると輕い蒸氣が、其の汚ない、重い、落ち易い部分を地上に殘して、澄み切つた空へ上つて行つて、そしてエーテルの中にみぢんになつて融けて了ふ。あなたは、私の汚ない心を、あなたの光線によつて觸れたのです。そして私の心は、其の時からあなたに向つて上つて行つてゐるのです。あゝ、其の名を神祕と云ふ、わが知られざる神、私はあなたを求めてゐました。あなたは眞理の中にゐらつしやる。私はあなたに向つて行きました。あなたは正義の中にゐらつしやる。私はあなたを愛しました。私はあなたの爲めに死にました。あなたは生の源泉でゐらつしやる。

あゝ、知られざる神よ、本當にあなたは私を棄てゝおしまいになるのですか。私の重い懷疑、私の輝く研究、私の困難な生涯、私の自由な死、これをあなたへの血のない犧牲（いけにへ）として、祈禱として悲歎として、受取つて下さい。丁度澄み渡つたエーテルの洋が、落ち易い蒸氣の飛んで行く流れを受けるやうに。どうぞこれを受取つて下さい。其の名を知らざるあなたよ、永遠の光なるあなたに向つて進む祈の道を、過去の夜の霧のやうな怪物共をして遮らしむるな。さあ道を讓れ、天紅の光を遮つてゐる、雲のやうな怪物共！。民衆歸依の神々なる汝等に敢て云ふ。汝等は不正不義の神である。正義を離れた汝等オリンピヤの神々よ。此處のオリンピヤでは、眞理すら猶怪物ぢやないか あらゆるものゝ根源に溯る私は、遂に此の結論に達したのだ。散れ、死せる雲々！私は今、全生涯の間求めてゐた知られざる神の許へ私の道を行く私は行く。』

雷は鳴つた。けれども小さな、切れ〳〵になつた、梢のやうなものが、雷神のふら〳〵した手から落ちた。あらしの音も、よぼ〳〵として、山の向うへ行つて、一時は峽間の處で鳴つてもゐたが、だん〳〵遠くへ行つて、遂に消えて了つた。

クテシプが其の喫驚した眼を開いた時、其の眼前に嘗つて見た事もない光景が現はれてゐた。夜は去り、雲は散つてゐた。神々の怪物は、大急ぎに、丁度牧人の著物の上の黃金色の模樣のやうな、蒼穹の中へ飛んで行つた。

山の頂はもう彼の不思議な雲の中から出て、松火のやうに、谷谷の青い雲の上に輝いてゐた。そしてゼウスの神も其の他のオリンピヤの神々も皆んな何處へか行つて了つて、只山の頂と太陽の光と高い空とが殘つてゐるだけだ。それだのに猶クテシプは、全自然がつまらない草木に至るまで、或る神秘な生の打擊に打たれてゐるやうに、明かに感じた。何にかの息が、大氣の柔かい風の中に聞える。何にかの聲が、微妙なハーモニーになつてさゝめいてゐる。何にかの見えない步みが、けだかい日の光の進行の中に感ぜられる。

そして一人の男が、まだ其の燦爛とした山の上に立つてゐた。そして沈默した驚歎と力強い狙とを以て、其手を差延べてゐた。處が不意に、何にも彼も、皆んな消えて了つた。そしてクテシプの目覺めた心には、知られざる生の息を吹きこまれた自然の去りにし感と比すれば、今の普通の太陽の光が、如何にも憐れなる曙か薄暮（たそがれ）かのやうに思へた。

死んだ哲學者ソクラテスの弟子達は、此の話を、深い沈默を守つて聽いてゐた。やがて第一番にプラトーが其の沈默を破つた。『此の夢と其の意味とを研究しなければならぬ。』そして外のものも皆んなそれに答へた。

『研究しなければならぬ。』

# 人と超人

バアナード・ショウ作
堺利彦譯

## 第一幕（つゞき）

タナア（オクテビアスと二人になり、氣まぐれらしくオクテビアスを見やり）テビー、君は社會に出て何かやらうと思ふか。

オクテビアス　僕は詩人として社會に立たうと思ふ。今に劇の大作をやる積りだ。

タナア　アンを女主人公にしてか？。

オクテビアス　あゝ、實はソウだ。

タナア　ぢや君、用心し玉へ。アンを主人公にして劇を作るのは構はないが、用心しないと君、アンは君と結婚しちまふよ。

オクテビアス（溜息を吐いて）　それほど結構な事は無いぢや無いか、君。

タナア　ハヽア、君の頭はモウあの女獅子の口にはいつてるんだ。君はモウ半分呑まれてるんだ。リキと云つて一嚙、チキと云つて二嚙、テビーと云つて三嚙さ。其の三嚙やられたんだから、君はモウ是から呑込まれるばかりだ。

オクテビアス　だつてアンは誰にでも同じなんだよ。君が善く知つてるぢや無いか。

タナア　ウン、そりや彼奴は誰の脊中でもあの手の掌の一打で壊して了ふんさ。だけど、問題はコウなんだ。彼奴が、君と僕とどちらを食はうと思つてるか。僕の見る所に依れば、君を食はうと思つてるね。

オクテビアス（ぢれた樣子で起ち上り）アンは今二階で、父を思うて泣いて居るんだ。それに君の樣なそんなヒドイ事を此際に云ふのはアンマリだよ。だけど僕は實際食はれたいんだから、君の其の亂暴な言方でも、幾らか僕に希望を與へるから我慢するんだ。

タナア　テビー、そこが即ち女の恐ろしい所なんだよ。君は其爲にモウ自分で自分の破滅を望む樣になつてる。

オクテビアス　だつてそれがナゼ破滅だらう。僕は一身の完成だと思つてる。

タナア　ウン、そりやアンの目的の完成なんだ。然し其の目的は決してアンの幸福、若しくば君の幸福を計るのではなく、只『自然』の爲にするのだ。女の有するアノ活氣は創造力の盲動なんだからな。女はそれが爲には自己をも犧牲にする。況んや男を犧牲にする事なんぞ遠慮しやしない。

オクテビアス　然し君、女は其の愛する人を犧

牲にしまいと思つて、それが爲にこそ自己を犠牲にして居るんぢや無いか。

タナア　それが間違の最も甚だしきものなんだよ、テビー。自分を犠牲にする女が、即ち最も用捨なく人を犠牲にする女なのだ元來が利己的で無いのだから、小さな事には親切だが、元來が一つの目的を有して、其の目的が自分一身ので無く、全宇宙の目的なんだから、男なんと云ふ者は、彼等に取つては、只此の目的の爲めに使用される器械に過ぎない。

オクテビアス　ジャック、そんなにヒドイ事を云ふものぢやないよ。婦人は實に善く我々の世話をして呉れるぢや無いか。

タナア　ウンそれはソウだ。兵士が善く銃の世話をする樣に、音樂家が善くヴアイオリンの世話をする樣に。だけど彼等は果して善く我々男子の目的或は自由を許すか。彼等は果して我々と互に相助けるか。如何に強硬なる男子と雖も、一たび彼等の手に占有せられて能く再び逃れ得る者があるか。彼等は男子が危險に陷れば戰慄し、男子が死すれば泣く。然し其涙は男子の爲に注がれるのではなく、父たるべき者の徒らに逝き、子を產む事の空となれるを悲むのである。彼等は男子が自己の快樂の爲に婦人を器械視する事を能く責めるが、然し元々男子の私慾といふ樣な、そんな微弱な出來心が、どうして婦人を屈服させる事なんど出來るものか。婦人の一身に体現せられた此「自然」の大目的は、全く男子を奴隷にして了ふのである。

オクテビアス　然し其の奴隷になる事が我々男子に取つて幸福だつたら、何も構はんぢやないか。

タナア　そりやア君が別に自分の目的を持たずに、世間の男共と同じ樣に、只一家の稼ぎ人になるのなら、それでチットも構はんさ。けどもテビー、君は藝術家ぢや無いか。婦人の目的と同じ樣な、專心熱中すべき暴戾な目的を持つて居るぢや無いか。

オクテビアス　何も暴戾な事は無い。

タナア　イヤ實に暴戾だ。眞の藝術家は其妻を餓ゑしめる。其子をハダシで步かせる。七十になる其母を台所に追ひ使ふ。それでも自己の藝術以外の仕事は決して仕ない。彼は婦人に取つては半ばは生體解剖者であり、半ばは血を吸ふ鬼である。彼は婦人が我が此の胸奥の創造力を喚起し、我が此の冷たき推理より我を救ひ、又我をして幻を見せしめ、夢を夢みしめ、謂はゆる神來の感興を起さしむるの力を有する事を知つて居りながら、而も彼は猶其の婦人を研究し、其の因習の面を剝ぎ、其の最奥の秘密を驚かさんとする者であるのだ。而うして彼は之を婦人自身の爲にするのだと稱するが、實は自己の爲にするのだ。彼は母の乳を盜んでそれを黑く染めて印刷屋のインキと爲し、それを以て其母を嘲笑し、理想の婦人を讃美する。彼は婦人の爲に姙娠の苦痛を無くしてやると稱するが、實は小供の地位を奪つて自分が婦人の柔しき介護を受けようとするのだ。凡そ結婚制あつてより以來、大藝術家はいつでも善くない夫と極つて居る。それだけならまだ善いが彼は實に人の子を取る者である、生血を吸ふ者である、僞善者である、詐欺者である。若し彼が一層巧にハムレットを演じ、一層美なる繪畫を畫き、一層深き詩を作り、一層大たる劇を作り、一

層幽玄なる哲學を作り得るならば、それが爲に千人の女が犠牲となつてスがれようとも、それが爲に人間の種が盡きようとも、彼は敢て之を意に介する者では無い。何故かと云ふにだれ君、藝術家の事業は我々の實相を我々自身に示すに在る。一体、我々の心なる者は、畢竟、我々自身に對する此の智識に過ぎない。そこで此の智識に一點一畫を加ふる者は、即ち新しき心を創造(クリエート)するので正に婦人が新しき人間を創造するが如きものであるのだ。それで男子が此の創造(クリエーション)の熱に浮かされて居る時には、丁度婦人と同じ樣に殘忍無慈悲で、丁度女が彼に取つて危險な樣に、彼も亦女に取つて頗る危險で、そして亦恐ろしく人を迷はす力がある。だから有らゆる人間の爭闘の中で、藝術家と世話女房との爭ひほど、爾く裏切の多い、爾く慘怛たる者は、決して他に無い。何れが果して他の一方を亡ぼし盡すか、それが即ち兩者の爭點なんだ。而も其の兩者が、君等のロマンチツクな聲音(こわね)で云へば、互に相愛して居るのだから、いよいよ以て其爭ひが堪らなくなつちまふ。

オクテビアス　マアそれにしてもさ――僕は夢にもそんな事を是認しや仕ないが――我々は其堪らないほど激甚な闘爭の中からして、極めて崇高な品性を得るのぢや無いか。

タナア　よし、それぢやテビー、君が今度ベンゴールの虎か羆(ひぐま)かに會つた時、善く其の言葉を覺えて居玉へ。

オクテビアス　だつてジャック、僕は相互の間に愛の存して居る時の事を云ふのだぜ。

タナア　可いとも。虎が君を愛するんだよ。凡そ世に我が餌食を愛するほど眞摯な愛は決して他に無い。アンが君を愛するのは即ちそれだね。彼は丁度旨そうな半熟の肉を突ツつく樣に、君の頰ツぺたを突ツついたぢや無いか。

オクテビアス　ジャック、僕は君の言ふ事は一切氣に仕まいと極めて居るから可いけれど、さもなくちや僕はモウ疾くに逃げ出して居るかも知れない。君はどうかすると實にヒドイ亂暴な事を云ひだすねえ。

ラムスデン、アンと共に急ぎ足で歸り來る。二人とも先にはシホらしき愁傷の體で、サモ悠々と品よくして居たのが、今は何かサモ事ありげに、殊にラムスデンは頗る困つたと云ふ樣子振である。ラムスデンはつかつかと二人の間に來り、オクテビアスに話しかけようとしたが、タナアを見て急に身を引き締うた。

ラムスデン　タナア君、私は君がまだこゝに居られうとは思ひかけなかつた。

タナア　僕が邪魔になるんですか。そりや失敬。左樣なら。(戸の方に行きかゝる。)

アン　ちよいとジャックよ。おぢいさん、どうせ知れるんですもの、遲かれ早かれ。

ラムスデン　オクテビアス。茲に一つお前に取つて極めて重大な事件があるのだがな。それは極めて內密な、極めて愼重を要する事件で、而も極

めて悲むべき事件であるのだがな。どうだ、それでもお前はタナア君がこゝに居て善いと思ふかな

オクテビアス（色を蒼くして）　私はジャクに對して少しも秘密はありません。

ラムスデン　まあお前が其の決答をする前に是だけの事を云はう。其の事件と云ふのはお前の妹に關する事なのた。而も極めて恐るべき事件なのだ。

オクテビアス　ビオレットの事ですか！。一體何事でせう。あれが死にでもしましたか。

ラムスデン　それよりモット惡い事かも知れない。

オクテビアス　ぢや何かひどい怪我でもしたのですか。

ラムスデン　いや、そんな事では無い。

タナア　アン。僕も聞きたい、話してお呉れよ何事だ。

アン（半ば口ごもりながら）　私にや話せない。ビオレットは恐ろしい事をしたんだから、早く何處かにやらなくちや。（アンはひらりと身をかはして、ラムスデンの机の前に行き、其の椅子に腰かける。三人の男は向き合つたまゝで跡に殘る。）

オクテビアス（事体を推察して）　ラムスデンさん、本當にそう云ふ譯なのですか。

ラムスデン　そうだ。（オクテビアスはガツカリして椅子に仆れかゝる。）　ビオレットは三週間前、パリー・ホワイトフイルドの處に行つたと我々は思つて居たが、實はそこに行かなかつたと見える。そして昨日婚約の指輪を嵌めて妙な醫者の處に行つた。すると偶然そこでパリー夫人と出會つた。それで總ての事が露現して了つた。

オクテビアス（拳を堅めて立ち上りながら）　其の相手は何奴です。

アン　それはビオレットが云はないの。

オクテビアス（再び椅子に仆れかゝり）　まあ何と云ふ恐ろしい事だらう！。

タナア（怒を帯びたる皮肉を以て）　實に恐ろしい事だ。驚くべき事だ。ラムスデン君の云ふ通り、死んだよりもモット惡い事だ（と云ひながらオクテビアスの側に寄り）　テビー、是が鐵道にでも轢かれて、骨が粉々に碎けたとか、それで無くとも何かそんな樣な、立派な、人聞のいゝ、同情に値する事だつたらなア、君は嘸嬉しいんだらうか。

オクテビアス　ジャック。そんな殘酷な事を云

つて呉れるな。

タナア　残酷！。オヤ〳〵、君は何を泣いてるんだ。玆に一人の婦人があつてさ、下手な水彩畫を畫いたり、グリーグやブラームスの歌を歌つたり、音樂會や夜會にホッツキあるいたりして、徒らに時と金とを費して居たと思ひの外、いづくんぞ知らん、彼はいつの間にかそんな馬鹿をやめて了つて、婦人の最高の目的、最大の職分を遂行して、生殖し增殖して人を此の地上に充たさんとして居る。然るに其の勇氣を賞賛しようともせず、其の本能の發動を慶賀しようともせず、更に又其の婦德の成就に對して天冠を捧げようともせず、『我が子は生れたり、我が子は授けられたり』といふ、彼の勝利の曲を唱へようともせず。諸君はこゝに寄つてたかつて――先には喪中と云ひながら蟋蟀（こほろぎ）の樣に面白げにして居た癖に――今は打揃つた佛頂面をしてさ、ビオレットが極惡重罪でも犯したかの樣に、サモ恥辱らしい、サモ不面目らしいザマをして居るのは何事だ。

ラムスデン（憤然として怒鳴出し）　そんな卑猥な亂倫な言を此家で吐く事は相成らん。（と、拳を堅めて机を叩きつける。）

タナア　宜しい。又してもそんなに人を侮辱するなら、我輩はお言葉どほり此家を立去る。アン、ビオレットは何處に居る。

アン　どうして？。あなたビオレットに會ひに行くの？。

タナア　勿論、僕は會ひに行くさ。彼を助けてやらなくちや。彼は金も入るだらう。彼に敬意と祝意とを表さなくちや。又彼れの子供を保護しなくちや。諸君は迚もそれを保護しそうにないから、僕が保護する。ビオレットは何處に居る。

アン　まあ、そんなにヤケに云はなくたつて好いでせう。ビオレットは二階に居るけど。

タナア　何に！　此のラムスデンの神聖な屋根の下に居るのかそりや大變だ、ラムスデン君。早く行つて追ひだし玉へ。一刻も早く此の汚辱から君の家の閾を淸め玉へ。そして此の淸高なる英吉利の家庭の純潔を擁護し玉へ。僕は行つて馬車を呼んで來る。

アン（は驚いて）　おぢいさん、そんな事しちやイヤですよ。

オクテビアス（愁然として立上り）　ラムスデンさん、私が連れて行きます。一體あれがそんな體（からだ）であなたの家に來る權利は無いのです。

ラムスデン（憮然として）　何に、私は飽くまでも彼を助ける氣で居るのだ。（タナアに向ひ）　君は又何と思つて、私がそんな不都合な事でもする樣に云ふのですか。飛んでも無い事だ。私は私の嚢底を拂ひ盡しても、あれを君なんぞの世話に成らせはしない。

タナア（靜まりて）　ウン、それぢや宜しい。ラムスデン君は主義どほりを實行するんぢや無いんですね。それぢや宜しい、それぢやモウ皆んなビオレットの味方なんだ。

オクテビアス　然し其男は誰だらう。其男が妹と結婚さへすれば収まりは着くのだが、是非ともそうさせなくちや。若し肯かなかつたら私が承知しない。

ラムスデン　それだよ、オクテビアス。そうさせなくちや。全くお前の云ふ通りだ。

タナア　それぢや何だれ、諸君は別に其男を惡漢とは思はないんだな。

オクテビアス　惡漢とは思はない！。無情も亦甚だしい惡漢ぢや無いか。

ラムスデン　そうだ、實に畜生の樣な奴だ。アネーの前でこんな汚い言葉を使つては成らないのだが、私はそれより外に言ふ言葉が無い。

タナア　それぢや君、君の妹を救ふ爲に畜生と結婚させようと云ふ譯だれ。僕から見れば、君等は丸で氣違だ。

アン　馬鹿おつしやいよ、ジャック。そりや全くテビーの云ふ通りだわ。だけど其人が分らない人だもの。ビオレットは云はうとしないし。

タナア　其人なんぞ誰だつて構はないぢや無いか。其人は其人の分を盡したのだから、跡はビオレットが始末する丈の事さ。

ラムスデン（激昂して）　默れ！　馬鹿者！。誰か知らんが玆に一個の放縦無賴な惡者がある。人殺しよりもモツト惡い惡黨がある。そうして我々はそれを知らずに居るのだ。そうして我々は其奴と握手する。其奴を我々の家屋に入れる。其奴に我々の娘を托する其奴に――其奴に――

アン（甘える樣に）　マアおぢいさん、そんなに大きな聲しないで頂戴な。どうせそりやコワイ事に極つてるけど、だけどビオレットが其人を云はなきや仕方が無いでせう。どうにも仕方が無いでせう。

ラムスデン　フン？。仕方があるかも知れんさ誰か玆に特別にビオレットと親密にした人があるとすれば、それで大概分るぢや無いか。誰か玆に非常に放縦な主義を取つて居る者があるとすれば――

タナア　エヘン。

ラムスデン（一層聲を高めて）　固より。モ一度云はう。誰か玆に非常に放縦な主義を取つて居る者があるとすれば――

タナア　誰か玆に非常に短氣な自制力の無い人があるとすれば

ラムスデン（呆れ返りて）　それでは君は、此の私がそんな事を仕得ると云ふのか。

タナア　いやラムスデン君、是はどんな男でも仕得る事ですよ『自然』の目的を妨げようとすれば、何時でもこんな事が起つて來る。泥は乞食の襤褸にも附くが、法官の法服にも附く、僧正の衣の袖にも附く。オイ君、テビー。そんなにビツクリする事は無い此の犯人は僕であるかも知れない。ラムスデンであるかも知れない。かも知れないと云ふのなら、誰にでも嫌疑は掛る。それなら君、只ジツト斯うして、ラムスデン君の樣に只無暗に其事を拒否して見たつて仕樣が無いぢや無いか。

ラムスデン　私は其――　私は其――（と喉につかへて跡が云はれぬ。）

タナア　テビー、實の犯人だつてあんなに慌て、辯解はしまいと思ふが、然し兎にかくラムスデン君の潔白な事は分りきつて居るだらう。

ラムスデン（がつかりして）　そう云つて呉れゝばマア好い。君は態と皮肉な事を云つて、妙な人聞の惡い言ひまはしをするが、君の言ふ事にも少しは道理がある。オクテビアス、お前はまさか私を疑ひはしまいな。

オクテビアス　あなたを疑ふ！。そんな事があるものですか。

タナア（冷かに）　只少しばかり僕を疑つてゐるだらう。

オクテビアス　ジャック、君が眞逆――

タナア　なぜ眞逆だらう。

オクテビアス（呆れ返り）　なぜ眞逆だらうツて？。

タナア　其の眞逆と云ふ理由を僕が云はう。先づ第一、そんな事をすれば君と僕が喧嘩になるだらう。次に、ビオレツトは僕を嫌つてる。第三に、僕が若しビオレツトの子の父たるの光榮を有するとすれば、僕はそれを否むどころか、寧ろそれを自慢するだらうぢや無いか。サアもう是で安心し玉へ。君と僕との交情の破れる恐は無い。

オクテビアス　君がモ少し尋常にして呉れさへすれば、僕は勿論そんな恐ろしい疑ひなど起すのぢや無かつたのだ。失敬した、許して呉れ玉へ。

タナア　失敬も何もあるもんか。それよりかマア皆坐つて一つ親族會議を開かうぢやないか。（タナア腰かける。皆々少々遅々ながらそれに倣ふ。）ビオレツトは今國家の爲に任務に服しようとして居る。それで彼は其の任務の濟むまで罪人の如く追ひ立てられようとして居る。一体、二階ぢや今何をしてるんだね。

アン　ビオレツトは女中部屋に居るんです。勿論、獨りで。

タナア　なぜ又客間に居ない?。

アン　分らないね、あなたは。客間にやミス・ラムスデンと私の母とで色々相談してるんだもの。

タナア　ハーア、女中部屋が監獄と云ふ譯だな。そして是から罪人が裁判官の前に引出されようと云ふのだな。古猫奴等が！。

アン　まあジヤツク。あんまりだわ。

ラムスデン　然し君は今その猫の家に客となつて居るのですぞ。私の妹は即ち此家の主婦だ。

タナア　それぢや僕もミス・ラムスデンから女中部屋に監禁されるかも知れない。然し猫は取消す。猫の方がモツト物が分つてる。アン。僕は後見人としてアナタに命ずる。早く行つてビオレツトを慰めてやりなさい。

アン　私もうビオレツトに會つたんですの。だけど彼人(あのひと)、自分から出て行くツて、強情を張りさうなんですもの。テビーが行つて善く話したら可いでせう。私そう思ふわ。

オクテビアス　僕が妹に向つてそんな話が出來るもんか。（とメリこんで了ふ。）

アン　そんなにショゲて了つちや仕様が無いわテビー。皆んなの爲だから我慢してそうして頂戴な。

ラムスデン　オクテビアス、人生は歌や踊ばかりでは無いからな。一つ男らしくやつで貰ひたいものだ。

タナア（又じれ〵〵して）あゝあゝ氣の毒な兄(にい)さんだ！　氣の毒な御親類だ！　氣の毒な猫共だ。誰も彼も何と云ふザマだらう一方の婦人は今新たに生命を作り出ださんが爲に、自己の生命の危險を冐さうとして居るのに。オイ、テビー。そんな自分勝手な馬鹿を云はないで、早く行つてビオレツトに會つて來玉へ。そして來ると云ふなら此處(ここ)に連れて來て呉れ玉へ。（オクテビアス、立ち上る。）我々は皆んな彼れの味方だと、ビオレツトにそう云つて呉れ玉へ。

ラムスデン（立上り）　イヤ、それはイケナイ。――

タナア（是も立上りてラムスデンの言葉を遮り）ハ、ア分つたそれでは君等の良心はそれを許さないけれど、然し行ふ事は矢張り行はうと云ふのだな。

オクテビアス　僕は斷言する。僕は決して身勝手を考へたのぢやない。只、こんな場合、眞に正當な行爲を仕ようと云ふには、どうして可いか實に六ケしいのだもの。

タナア　それはれ君、テビー。君等は例の御信心深い英國風の習慣でれ、此の世の中を丸で品性修養の道場にしようと思ふんだから、それで時とすると、先方の人の身の爲を考へる事は忘れて了つて、自分の厄介な道德論ばかり考へこむ事になるんだ。現に今の問題は母の身を幸福にして生れる子を健全にする事だ。それを主眼として考へれば、取るべき道は直ぐに明かになるぢや無いか。

オクテビアスは只當惑の樣子で出で去る。

ラムスデン（屹となりてタナアに向ひ）　然らば君の云ふ樣にすると、道德は一體どうなるのです。

タナア　道德とは徒らに貞操を責めて婦人を泣かせ、罪もな

其子に耻辱の烙印を與へる者に過ぎない。然し今こゝで我々の間にや、そんな事は無いのだから、有がたい。一体道德は惡魔の子だ。其親の許に遣つちまふがいゝ。

ラムスデン　大方そんな事だらうと思つた。道德を惡魔の許にやつて了つて、そして放縱な男女が勝手な眞似を仕ようと云ふのだらう。それで此の英國の將來はどうなる?。

タナア　いや、英國は幾ら君に叱られてもチヤンと跡に生き殘る。御心配は無い。所で、君はそう云ふが、實行に於いては矢張り我輩と一致して居る譯ですね。

ラムスデン　君とは精神が違ひますよ。其の理由が違ひますよ。

タナア　ぢや今に誰か聞きに來たら大いに其の理由を說明するといゝ。(タナアは向きかはりてスペンサーの肖像の前に立ち、愁然としてそれを眺める。)

アン(立ちてラムスデンの側に來り)　おぢいさん。あなた二階にいらしつて、今こゝで私達の話したこと、皆に知らして上げたら善かなくて?。

ラムスデン(タナアの方をキラリと見やりて)　私はお前を彼人と二人でこゝに殘して置きたくない樣な氣がする。お前も一緒にお出でないか。

アン　ですけど、おぢいさん、おばさんは私の前でそんな話するのイケナイと仰るでせう。だから私行かない方がいゝわ。

ラムスデン　そうだ。成程そうだね。アネーはいゝ子だ。

ラムスデンはアンの肩を叩く。アンはニコリとしてラムスデンを見あげる。ラムスデンは喜んで出て行く。ラムスデンを出だしやりて後、アンはタナアの方に向く。タナアはこちらに脊を向けて居るので、アンはちよと自分の身なりを繕ひ、それからソツト側に歩み寄り、直ぐ耳元で話しかける。

アン　ジヤツク、(タナアはビツクリして振返る。)　あなた私の後見人になつて嬉しくツて?。あなた是から私の代りに責任を負つて呉れるんでせうね。

タナア　又あなたの例の身替りが一つふゑた譯さな。

(第一幕未完)



# 二月の小說

寒

■怪談（畑耕一）　今の文學は卑怯者の文學だ、必ずしも社會とか、人生とかに對してばかりではない、凡て彼等には嚴肅にして慘痛なる現實と常面して、究極までつき詰める熱情を欠き、煩悶を欠いて居る。彼等は先づ煩瑣なる學慾と、無味なる家庭とに飽く、そして單に自個の好奇心を滿す爲めに、無爲の結果生ずるエンヌイを扮らはす爲めに、チラと人生の一角を窺く。若くは自個の日常生活を、極端に空想化せんと試みる。そして失敗すると、もう再び之をくり返す勇氣が無い。呼吸まで他人にして貰ふやうな懶惰な生活を送り乍ら、大篦棒な囈語を吐いて居る。こんなものが藝術なら幇間は立派な藝術家だ。此の作に何の價値をも見出す事は出來ないが、強ひて求むれば、こういふ紳士閥青年の思想感情を、具體化した處位なものだ。（三田文學）

■秋（仲田勝之助譯）　ストリンドベルヒの短篇、夫婦になつてから十年も經つて、子供も一人出來た。女房は世帶にかまけて悉皆醜くなつてしまつた。然し亭主は旅行中ものたりなさの余り昔の戀人時代に返るつもりで妻を呼び寄せる、が何事も豫期に反して巧く行かない、昔のやうな心もちになれない、亭主が『昔で滿足しやうよ』と云ふと女房も『もう秋ですれ』といふ。敢てストリンドベルヒを俟たずとも、こんな物は風葉邊りがいくらも書いた、如何いふつもりで譯出したのか、譯者の考へが解らない。（早稻田文學）

■青い日の女（鈴木三重吉）　二月の創作界に於けるのみならず、此の作者の作物中で傑れたものゝ一であらうと思ふ。夏の晝と居留地の陋巷とを背景として、如何なる人生の流轉に遭つても平氣で居る程、氣も心も荒み切つた女の底知れぬ放浪の運命が實にビビツドな力で描き出されて居る。但だ『今度はどんな事があつても、もう二度とこゝへ歸つて來やしない、死んぢまふ、あいつに捨てられたら死ぬんだ、もう面倒くさいもの』といふ程に、生に倦怠して捨鉢になつて居る女としては、余りに平氣に余りに呑氣に過る程、面白そうに喋べり散らして居る。悲痛な色なんぞは、何處にも見出す事が出來ない。（新潮）

■復讐（人見直）　ムツハ……、ウツハ……だ。（青鞜）

■雛勇（長田幹彦）　此の作者にも呆れたものだ、珍らしもの好が一寸ほめるといゝ氣になつて、書くものも書くものも京都の舞妓はんと來ちや、如何に何でも大低食傷させられて了ふ。況んや、いつもいつも仝じやうな、感傷的な事ばかり描いて、些の新味も、深刻も有せざるをやだ。（中央公論）

■暗夜（小川未明）　生活が苦しい、家庭が面白くない、家を飛び出して酒を飲む、女を買ふ、そういふ生活を描寫し出してから文壇は約十年に垂々とする。そして未明なんていふ人はまだそんな事を書いて居る、一體どういふつもりで居るんだらう、もう些し眼を開いて文壇以外の實社會を觀察し給へ、君等の衆愚と罵つて居る多數の民衆さへも、もつと深い、大きな、意義のある煩悶をし、もつと自由な、幸福な、合理的な生活をなさんとして、慘ましい犧牲を拂ひつゝ努力を續けて居るではない乎。こんなものが小說なら、愚痴な女の泣言は不朽の傑作だ。（仝上）

■柏子木の音（尾嶋菊子）　批評するに足るやうなものにやないけれども、聞き捨てにならぬ文句がある。『生活といふ嚴しい實際問題に遠く懸け離れた文筆に携つて』云々とは何だ、携つて居る文筆が生活問題と

かけ離れて居るなら、生活問題は抑々如何なつて居るのだ。女つてえものは調法なものだ、そんな呑氣な考へで小說を書いたら傑作が出來る事疑ひある可からず(スバル)

■賭場の逃れ(田中民三)　肺病になつて賭場の張番をして居る若い男の運命を描いたものだ、印象が散漫で、纏つた感じを受け得なかつた。(黑耀)

■行者の自白(水島爾保布)　佳作だ、も し作者が更に、如何に今日の警察制度と裁判制度とが、個人の心理作用を無視し、單に證據といふ如き極めて薄弱なる事物に依賴し、若くは欺瞞と譎詐との上に羅致と糺問との手段方法が振はれて居る乎を想ひ、之に對する强烈なる憎惡と反抗との精神に充ちて居たならば、此の一篇は恐らくより以上のエフエクトとビゴアとに富んだであらう。一篇の內容は一陸軍士官の妻が何者かに辱しめられた上殺害されて居た、警察は百方之が犯人の探査に盡力した末、遂に一人の行者を拘引した。そして甘言と脅迫とを以て、犯罪を自白せしめやうとする。行者は夢のやうな思ひの裡に、自分が犯人だと云て見たら如何なだらうと、其儘犯人だと云つて了ふ。そして愈々裁判となるや彼は結果の餘りに豫想外だつたのに驚き怒つたが、證人の士官の貌を見て一種の勝利を感じた。此の最後が、作者の未だ個人的興味から進み得ない爲に、當然陷ゐつた一種の諦らめである。(モザイク)

■生に面して(伊藤六郎譯)　極めて短かいゴルキーの小說といふよりも、寧ろ寓話だ。譯は甚だ拙いが猶原作者の强い力が漲り溢れるやうだ。臆病で、卑怯で、引込思案の日本の文學者に、此の一小品を每日三誦さしてやりたい。(帝國文學)

■おみよ(阿蘇男)　何年ぶりかで昔馴染の女に會ふと、女はその當時男に惚れて居たのだと打ち明かす。然し今迄まるで他人の爲に生きて來たやうなものだから、是からは好き勝手な眞似をして、自分獨りの爲めに生きる、もう男にも決して惚れないと云ふ。男は女の捨て鉢な心を如何とかこうとか書いてあるのだが、輕つ調子な、面白そうな話しつぶりが、そんな風に考へたり捨て鉢なんかになつたりして居る女の語とは思はれない。男がい、氣になつて聞いて居る中に、酒の德利がウンと前に並んで、バカに高い勘定をとられるんだらうと思はれて笑止だつた。(同上)

## ■寄贈■

白樺　實業之世界
新公論　婦人評論
內外教育評論　黑耀
帝國文學　奇蹟
モザイク　新潮
新佛教　人生と表現
人物　東京魁新聞
青年文壇　郊外新報
スバル　眞人道
テラコッタ　ニコ〳〵
文藝講壇　村落通信
青鞜　鑛業及鑛夫
獨立評論(創刊號)

## ■二月號目次■

道德の創造(感想)……………榮
奴隸根性論(評論)……………大杉榮
石川三四郞に送る(感想)…榮
ワイルドの社會觀(評論)…山本飼山
本當に怒れぬ男(對話)……伊庭孝
ホワイトテロル(小品)……寒村
共和祭(小說)……………………大杉榮
改宗(小說)………………………荒畑寒村
人と超人 脚本)……………堺利彥
一月の小說(批評)………………寒
大久保より(雜錄)………………寒
消息…………………………………記者

# 大久保より

榮

■一月廿六日、日曜日を期して、同行十人ばかりで郊外散歩に出掛けた。

■最初市ヶ谷の道林寺に古川力作の墓を訪れたが、中野の奥の方へひつこしたといふので、こんどは淀橋の正春寺に管野須賀の墓を訪ふ。頬杖をついた觀音様の小さな石像が、釋淳烈信女之墓と書いた棒に寄つかかつてゐる。

■それから染井の墓地に、新村忠雄と奥宮健之の墓を訪ふた。新村の墓場の入口にある垣根の棒杭に、誰れのイタヅラだか知らんが、奇麗にアナーキストと刻み込んである。墓じるしには本人の名がなくつて、永井氏之墓とある。何んでも或るヤソの坊さんの好意だとか云ふ事だ。それだのに世の中には斯う云ふ好意を無にする奴もあつて、其處にも矢つ張りアナーキストだとか新村忠雄だとか云ふ字が刻まれて　ゐる。

■奥宮のは殆んどそれと背中合せの處にあつて、釋隨經信士之墓と書いた棒が立つてゐる。何んのお經に隨つたのだ知らんが、隨分怪しからんお經もあればあるものだと思つた。

■古川力作の墓はとう／＼見舞はないで了つた。

■二月二日、久しく思ひ立つてゐた秋田行を決行した。氣が狂つてゐると云ふ評判もある程なのだから、例の脹くれ面を火の出るやうに赤くして、頭の毛を逆立させてゐる坂本清馬を見る事と豫期してゐたが、會つて見て全く當がはづれて了つた。

■殆んど顔色と云つては無い。隨分痩せてもゐる。面會所の金網の處に顔を出すや否や、先づ僕に最敬禮を施して、次ぎに四五人居並んでゐるお役人に最敬禮をする。僕は何んだか涙が出さうになつて了つた。今はもうすつかり謹愼してゐるから安心してくれと云ふ。僕は再び何んだか涙が出さうになつて了つた。

■同行した崎久保靜江も、兄の誓一に會つて、一時は隨分獄中で亂暴をしたと云ふのに、今はもう弱り果てゝ、物を云ふ聲にさへ丸で力のないのを見て、もうとても長い事はありますまいなど、云ひながら、心の中では涙ぐんでゐたやうだつた。

■二月九日、近代思想第二回小集を、例の鴻之巣に開く。正客は内田魯庵岩野泡鳴の二氏、他は寄書家五名、社員二名。

■何んの話からだつたか忘れたが、西洋人と日本人との性慾の比較談が出て、大ぶ話に花が咲いた。魯庵氏に據ると、西洋では手淫に關する書物が、其の書目だけでも數冊の大部なものになつてゐて、其等の書物を見ると、日に卅何回と云ふやうなのは珍しくもないと云ふ事だ。

■斯う云ふ西洋人の間に、しかも若い時には「酒と博奕は止められもするが、女ばかりは……」と云つて盛んに執事から金をセビリ取つた一貴族が、遂に白髮を被つてから禁欲主義のトルストイとなつて現はれたのも、強ちに不思議はない。これは誰れだつたかの結論であつた。

■やがて泡鳴氏が、社會主義に關する質問を出して、切りに刹那主義の氣焔を吐く。お年寄株の魯庵氏が、マア社會主義の話などは止さうぢやないかと宥めるのだが、中々止みさうもない。とう／＼「腕力や金力が一切の解決をすると云ふのなら、色男は何うなるんだ」と云ふやうな妙な質問が何處からか出て、泡鳴氏大ぶ困つたやうだつたが「それは色男の方が負けるんだ」と遣つて了つたので、大笑ひになつて、討論終結。

■伊庭孝は本誌に寄稿するやうになつてか

ら、刑事の來訪がすこぶる頻繁になつて、あまりうるさいからと云ふので、當分寄稿を見合せるとの事。そして其の代りと云ふのでもあるまいが、矢張り近代劇協會の上山草人が、新手になつて入つて來た。

■久津見蕨村氏から下の如き手紙來る。

## ニイチエと社會主義

久津見蕨村

大杉さん、僕は御存知の病氣で久しく新聞も雜誌も讀まずに病院に臥て居たが、頃日漸く全快して退院したので、昨年から溜つて居た雜誌をポツ〳〵讀み初めた。時候違ゐだが眞に世の中は三日見ぬ間の櫻花で其間刮目すべきものが少なくない。

拙著「八面鋒」に對する貴雜誌の批評の如きも亦其一つである。近時新聞雜誌の新刊批評なるものが、頗ぶる輕卒に筆を執られて、多く當らずさわらずの月並評に陷り、碌碌書中の文字をも讀まず、序文と目錄位を見て宜い加減の評を下すのが多い中にありて、貴雜誌の批評は獨り選を異にしてゐる就中拙著に對する評言の如き、能く著者の意のある所を讀破して下された。僕は之に感謝せざるを得ない。

併し『十年一日の如くニイチエの眞面目なる祖述に從つてゐるのは、珍らしい事と云はればならぬ』との一言は僕却て亦珍らしく感ずる。凡そ哲學上の眞面目なる研究は何れの國、何れの學者でも皆斯くあるべきものだと信じてをる。少しく誇學の言に似たるも、僕が今日まで多少研究した哲學幷に哲學者は二三ある。何れも其一哲學に就て五年や六年は費してをる。前にカントの研究に從事した時でも其名著『純理性の批評』の英譯を何種類も集めやうと努めて其取調に時日を費した事があつた。そしてマキスミユラーとマイクルジヨンとヘイウードのとが各々長短はあるが最も注目すべきものであるとを知つた。古い所ではウイルリツチ、新しい所ではケアードなどのカント哲學の紹介位でカントを窺つて滿足することは僕の好まぬ所である。又ショツペンハツエルを讀んだ時でも之れと同樣に隨分長い時日間金にもならぬ事に困苦を重れたものである。

ニイチエに關しても僕のは此格で少しばかり研究を重れた丈で、苟も哲學の研究に從事するほどのものには、一向珍らしいと見るべき事ではないと想ふ。併しニイチエは機會があつたので適ま之を世に公にしたに過ぎぬ。他の哲學者並に哲學に關しては從來機會がなかつたので之を云ふことを得なんだのである。夫れを常世珍らしいと評して下さる。之にも僕は感謝せざるを得ない。

僕が『ニイチエと社會主義者とを無暗に反對させやうとしてゐる』のは、間違ゐであらうとのやうなる貴評に就ては、僕此文の最後の言として一言を加へねばならぬ。社會主義者の側ではニイチエの言の中社會主義に都合の好い部分ばかり取つて、そしてニイチエを推奬してゐる。けれども他の部分がある。大体から云ふとニイチエは近世の民主的傾向を好まぬ哲學者である。モツブの運動も亦隨つて嫌ひである。乃ち社會主義を『零落の友』と呼んでをる。僕は社會主義者が他は暫く措くも『ツアラツストラ』一部の中、『毒蜘』又は『賤民』の項を其同志者に推奬する勇あるや否やを疑ふ。更に僕はニイチエがブールジヨアーの良友でないとを知ると同時に、亦社會主義者の知己でもないとを信ずる。

# 讀者諸君へ

■本誌も讀者諸君の御同情と御援助とによつて、兎も角、此處に第六號まで漕ぎつけて來ました。そして號を逐ふ毎に、少しながら部數の增加を見るのも、諸君と共に甚だ喜びとする處であります。

■けれども本誌の基礎は、まだ中々確實と云ふ處には參りません。せめては直接購讀者の數が今の二倍にもなれば、もう財政上には殆んど心配する事もなくなるのですが、之れに就いても、矢張り又、諸君の御援助を乞ふ外はありません。

■目下第一號以來の殘本が少々づゝあります。若し諸君の御知合の中で、讀者になる見込のある人がありますれば、御面倒ながら其の住所姓名を御一報願ひます。第何號と云ふ御指定には應じかねますが、諸君の御名前で本社から見本として雜誌一部を送呈します。

■猶本誌創刊の際に半ヶ年分前金御拂込みの方は、丁度本號で前金切と相成ります。何卒引續いて御愛讀の程、御願ひ致します。




■定價一冊金拾錢、半年分前金五拾五錢。一年分前金壹圓。但し海外よりの御注文は別に一冊金二錢宛の郵稅を要す。

■每年數回擴大號を發行す、其場合には其定價に應じて前金より差引す。

■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。

■廣告料特別一頁拾五圓普通拾圓。

■本社振替貯金番號一七一六三

大正二年三月一日印刷納本

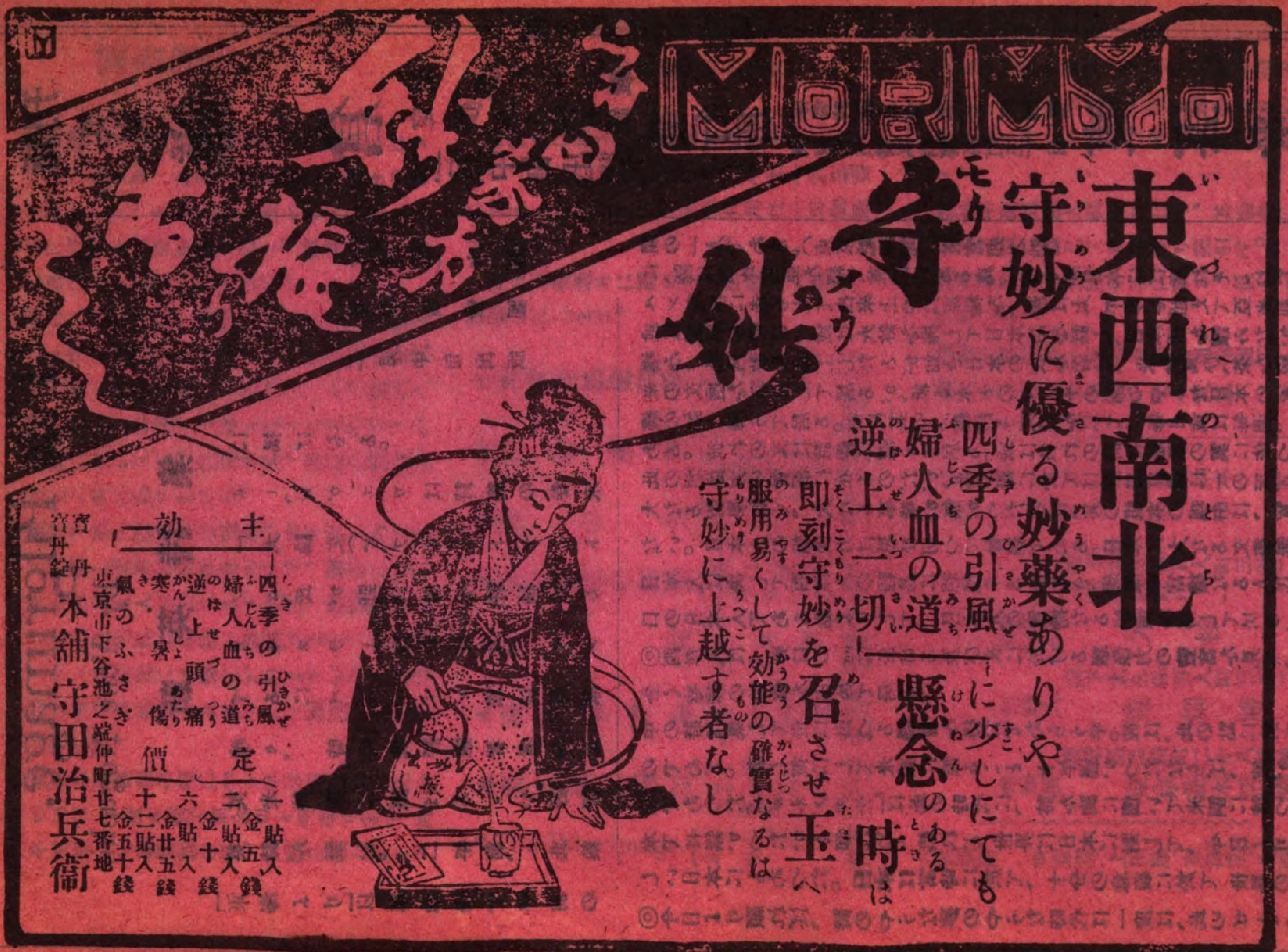
大正二年三月一日發行

編輯兼發行人 府下大久保百人町三五二 近代思想社內 大杉榮

印刷人 府下大久保百人町三五二 荒畑勝三

印刷所 淺草區黑船町二十八番地 東京並木活版所

大賣捌所 東京堂、上田屋、東海堂、北隆館


MORIMYO
東西南北
守妙に優る妙薬ありや
守妙
四季の引風
婦人血の道
逆上一切
に少しにても懸念のある時は
即刻守妙を召させ玉へ
服用易くして効能の確實なるは守妙に上越す者なし
主効
四季の引風・婦人血の道・逆上頭痛・寒暑傷・氣のふさぎ
定價
一貼入 金五錢
二貼入 金十錢
六貼入 金廿五錢
十二貼入 金五十錢
寶丹 寶丹錠
本舖 守田治兵衛
東京市下谷池之端仲町廿七番地

# 洋書バアゲイン

| | 原價 | 特價 |
| --- | --- | --- |
| ▲英文學史（ガアネツト、ゴツス共著） | 四十八圓 | 二十八圓 |
| ▲十九世紀文學主潮（ブランデス著六卷） | 十五圓 | 十三圓 |
| ▲トルストイ傳（ポールビ・リユーコツ著） | 四圓 | 一圓五十錢 |
| ▲露國革命運動（ジリアカス著） | 二圓五十錢 | 一圓七十五錢 |
| ▲フローベル全集（十卷） | 五十圓 | 二十圓 |
| ▲ゴーリキー全集（二十四卷） | 百二十圓 | 五十圓 |
| ▲モウパツサン全集（十七卷） | 七十五圓 | 三十圓 |
| ▲ド・ミユツセー全集（五卷） | 三十六圓 | 十圓 |
| ▲オスカア、ワイルド全集（十五卷） | 六十圓 | 三十圓 |
| ▲バルザツク傳（ロウトン著） | 十二圓 | 六圓 |
| ▲革命黨のタイプ（イグ・ナイラア著） | 二圓五十錢 | 一圓五十錢 |
| ▲犯罪社會學（エンリコ・フエリ著） | 八圓 | 四圓 |

▲其他文學、美術、演劇、社會學等の著書數種

右何れも英文特製美本、此際上記の如き特價を以て海外より取寄方御依賴に應ず。詳細は彰文閣に御照會あれ。

本郷區森川町一番地橋下三六

彰文閣　阿部彰

「萬朝報」記者 嘯風 大住舜先生新著

# 現代思想講話

四六判箱入
定價一圓廿錢
郵稅八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまづ其の思想の由來せる傳統を究め進んでゼームス、オイケン、ベルグソンの如き現代思想を代表する大思索家の說くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深邃なるその根本思想を捉へ來りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を養ひ人生の意義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著人若し架上に列ぬる裝飾品を得むとならば冀くば他に往け驀直に心の糧を求めんと欲せば則ち此の書に就け

久津見蕨村先生著
## 現代八面鋒
定價八十錢
郵稅八錢

高島米峰先生著
## 廣長舌
定價七十錢
郵稅八錢

堺利彥先生譯
## 社會主義倫理學
定價一圓
郵稅八錢

加藤咄堂先生著
## 筆と舌
定價七十錢
郵稅八錢

東京小石川區原町六番
振替東京一五六八六
丙午出版社

東京小石川原町六
振替東京一三五三
鷄聲堂

近代思想 第一卷第五號 大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行） 大正二年三月一日印刷納本（大正二年三月一日發行） 三月號 金十錢

近代思想　第一卷第五號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正二年三月一日印刷納本（大正二年三月一日發行）
三月號　金十錢